
キモ男 カンバ〜〜ック♪

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キモ男 カンバ〜〜ック♪

【Nコード】

N8151Z

【作者名】

タゴサク

【あらすじ】

前作のゼロのキモ男さんのカンバックスモノです。

キモ男さん、再び。(前書き)

前作のゼロのキモ男さんのカンバックモノです。

煮え切らなかったハーレムルートとか、その他を改めて見ます。

ヤケでルイズも面倒見ますよ。エエ。

ツルペタ、巨乳、ロリに年増バッチコイの変態SS目指します。

キモ男さん、再び。

.....

オレの名前を知ってるかい？

ヤマダタロウと言うんだぜ。

人生二回目の引き籠もり、誹謗や中傷にや負けたけど・・・。

やっぱりルイズに召還だああああ・・・。

タロウです。

皆様、オイラの事を覚えてるか？

一回人生を完全に終わったのに、またタロウしています。テヘっ♪

さて、現状を説明しますと・・・。

広い草原があります。

私は先程まで自分の部屋に引き籠もってネットしてました。

手元にはノーパソもあります。

お気に入りのフュギアさんも大切に懐に入れてありますよ。

ええ、ゼロ魔20巻のあのテファたんです。

で、目の前にいらっしゃるのが・・・。

ツルペタツンデレ爆発桃髪さんです。

そう、ルイズですよ。

はぁ・・・。またですか・・・。

ネ申様、居るのでしょ？

また使い魔ですか？

（タロウよ、カンが良いのお。）

もう慣れました・・・。

今回は死ぬまで引き籠もり続けるつもりだったのに。
どうして引き籠もらせてくれなかったのですか？

（イヤ・・・ヒマになったから・・・では無いぞ。

設定の都合とだけ言っておくわい。）

ナニやらゲフンゲフンと言う声もしますが、作者さんよ。
アンタ、ゼロ魔は卒業するって言わなかった？

おかげでオラは安心して引き籠もりが出きると思ってたのに。

しかし・・・どうするべ・・・。

ルイズの性格は記憶していますよ。

ですが、また面倒見るかと思うとね・・・。

気持ちが悪えてしまいます。

ネ申様、今回のスペシャルプレゼントはどうすんの？

正直、チートよりも現代化学が使える方がオラは嬉しいのですが。

（タロウよ、この脆弱なハルケギニアで現代化学が通用するか？
ムリだろ・・・。

抛って今回のスペシャルプレゼントは・・・。）

ドキドキドキドキ♪

（前回同様、全系統魔法のチートアード魔力無制限としまあす。
コレで頑張れるでしょ？別に嫌いなヤツは相手しなくてもこの世界
では生きて逝けるヨン。

頑張ってね。タロウ。）

おおお。最初から飛ばしてくれますな。ネ申様。

そう言えば転生してからは、何故か前世の現世同様。

全くモテないクンでしたが。

もしかして現世に未練が無い様に仕組まれてた・・・のですか？

ネ申様・・・。

（ヒューヒュー、ワシは何も知らないモンね。詳しくは作者にでも聞いてちょ♪）

ヤツが教える訳が無いでしょ。

はあ、じゃオラはこの世界で・・・。

ハーレムを目指します。

食える女は全て食ってやるうう。

（おお、遂にタロウからハーレム宣言が。

ガンガレよ。そんだけのチートがあればハーレム達成も難しくは無いでしょ。

んじゃワシは用が終わったので消えるヨン♪

ネットは前作同様神ネットと契約しといたからね。

好きに使ってちょ♪

ばいばいき～～ん♪）

ネ申様は何時ものバイキンバイバイを言うと霞の如く消えてしもた・。
・。

そろそろ桃髪が爆発する頃か・・・。

「チョット・・・アンタ・・・。

いい加減にコッチの話を聞きなさいよ・・・。」

「そう言う貴様は誰だ。余をこの様なド田舎に拉致しおって。」

オレはそう言うのと、ツルッパゲ先生の頭に即効魔法アデランスを唱えた。

瞬間、彼の寂しい頭はボン♪と言う音と共にフサフサの髪の毛が。

「お、おおおお。私の髪が。」

貴方はメイジですか？いいえ、きっと神様なのでしょう。

長年の私の苦悩が貴方の魔法で・・・」

「フム・・・。何やら貴殿から頭が寂しい寂しいオーラが出てたので、つい余の魔法で

フサフサにしてしもたが。

不味い事でもしたかな？」

「いいえええ。ありがたい事です。」

あつ、私はこの魔法学院の火の魔法教師をしています、ジャン・コルベールと申します。

もし宜しければお名前をお伺いしたいのですが・・・」

「それは構わないが、まずこの状況を説明して貰おうか。」

余はタロウ・ヤマダ。

この世界とは違う世界の魔法使いの教師をしておる。」

「誠ですか？でも私では出来なかった髪の毛の増殖魔法を見た感じでは信じるしかありませんね。」

いえ、世界が信じなくても私は貴方を信じます。

貴方こそが私の求めてた究極のメイジ、魔法使いですよ。

タロウ・ヤマダ様。」

何かコルベールさん、随分とフレンドリーですね。

狙った訳ではありませんが、あの方は敵にしたりく無いのですよ。この世界には当然おマチ姉さん、居ますよね。

彼女こそが自分の人生でも最高の姉さんでした。

彼女と過ごした生涯は本当に幸せでした。

この世界のマチルダも必ず・・・キリッ♪

幸せにしますよ。エエ。

さて、ルイズの仕込みでもかかりますか。

アレでも一応はこの世界のメインキャラです。

潰すとなるとアンチになりますから、適当に幸せにしましょ。

でも・・・この外見では・・・。

ピカッと閃いたのは、もしかしたらこの世界はアノ世界の続きでは無いかな？

と言う事です。

試しにあの方を呼んで見ましょう。

「アクア姉さん♪」

（呼んだか？タロウよ。）

やはりこの世界はアノ世界の続きでした。

呼んだら来るもんな。

「久しぶりです。○○○さん。（真名なので伏字です。）

久しぶりにこの世界に来たのですが、体系がアレなのですよ。

何とかかつての体系に戻して頂けません？」

（造作も無い事よ。タロウ。）

フム……。コレで良いか？)

見ると醜かったお腹もスリム。
記憶の中に残ってる一番ベスト時代の私の体系となっていたのです。
やはりアクア様は私の最高の女神様です。
感謝しますよん♪

(……。あまり褒めるな。タロウ。
照れるでは無いか……。)

「おおお、○○○様がデレた。
今回も世話になります。」

(任せるのだ。タロウよ。
お前が帰った事は他の精霊にも告げておこう。
フフフフ。
楽しみにしておけ……。)

水の精霊、アクア様は何やら不気味な事を仰ってましたが……。
ま、良いでしょ。
おかげでメタボから開放され、身体の軽い事♪

ん??????

皆様、どうしたのですか？
金魚みたいに口をパクパクさせて……。

「タ、タ、タ、タ、タ、タロウ様、貴方様は、水の精霊様とお知り
合いましたか？」

「ン?? ああ、あの方は以前からの友達ですよ。それがどうかしましたか?」

縦ロール髪のおぜう様は何やら言いたそうですな。

あれは・・・。

モンモンだ、確かに。

「あ、あのおお。タロウ様で宜しいでしょうか?

私はモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシーと申します。

長いのでモンモランシーと呼んで頂けると幸いです。

所で・・・。

先程、タロウ・ヤマダ様がお呼びになられた方は、この国で水の精霊様と呼ばれる存在ですよね?」

「多分、そうだと思うぞ。余は昔からの知り合いだけだな。」

「精霊様とお知り合いですか・・・。

あのおお、精霊様にお願いとか出きるのでしょうか?」

「そりゃ頼めば出きるぞ。だが、それがお前に関係あるか?」

「い、いいえ・・・。私の実家は水の精霊様の盟約の一員として、トリスティンで働いていました。

ですが、私の父があの方に粗相を働いてしまって、盟約の一員から外されてしまったのです。」

「ふーん、可愛そうだね♪」

「ですので、タロウ様があの方に取り成して頂けないか・・・と。」

「だが断る。」

余はこの国に拉致されたばかり。

自分の国に帰る術も無くした今の状態で、他人に構う余裕は無し。

ああ、忘れてたな。

その桃髪。

この責任はどう取る気だ？」

いきなり話を振られたルイズはパニックってしまった。

コルベール先生の頭に毛が生えたり、メタボのアレがいきなりスリムになったり、

水の精霊が出現したりと頭がオーバーヒートしてたのである。

「わ、私は・・・」

「タロウ・ヤマダ様、お待ちください。」

私がこの場の責任者です。どうか怒りを納めて頂けませんか？」

ルイズに話をさせると、場が崩壊すると判断したコルベールが話しに割って入る。

中々良い判断ですね。

コルベールさん。

「フム・・・。確かに「お子様」に責任取れと言ってもムリだな。

良かろう。コルベールさん。貴方と談判しましょう。」

「チョッ、お子様って誰の事よ。」

「そこに居るのは自分のケツも拭えない子供だろ？」

乳ナシ娘さん♪」

「フンガー、乳なんて関係無いっしょ。」

「まあ素材は悪く無いのに、そんだけ乳が無ければ女として見込みゼロですな♪

自分に任せれば乳くらいは成長させれますけど♪」

オレはそう言うときクハラマジックと叫び、モンモンに対し乳促進魔法を発射。

いや、ネ申様。

今回のタロウは一味違いますね。

イメージ通りにモンモンのツルペタが見事な形の乳に成長♪

「わ、私の胸が・・・。

ありがとうございます。タロウ・ヤマダ様。」

「アラ？もう一人のツルペタに発射するつもりが間違えてしもた。返してくれる？」

「イヤです。長年の悩みが解決したのですわ。

この胸は私だけのモノ。嗚呼、嬉しい♪」

モンモンは自分の成長した胸を大切に抱きかかえ、悶絶してた。

「チョッ、洪水のモンモン。その胸は私のモノよ。

私に渡しなさい。」

「絶対にイヤ・・・。コルベール先生、胸がとてもキツイので早退しますね♪」

「あ、ああ。分りました。モンモランシー嬢・・・。」

しかしタロウ様の魔法は凄いですね。

ハルケギニアの魔法とはケタが違います。」

「この世界の魔法を見た事は無いが、この程度なら余の生徒なら誰でも出来たぞ。」

（大嘘）。」

「素晴らしいですね。私も貴方に師事したいと思う位です。」

「若くないとムリですよ。それに私の勤めてた学校の生徒は、全員が魔力満点で

無いと入学試験すら受けられません。」

見た所、この学院の生徒は私の受け持ってた生徒と比較するのもバカバカしてレベルの

生徒ばかりです。先生も大変ですね・・・。」

実際にトリスティン魔法学院は幼児に魔法を教えるのと同じレベル。

ロクな教育を受けていないガキばかり。

だから滅びそうになるのよ。

多分・・・。

その後、召還会場でグダグダしてても仕方ないので、変態校長オスマンに交渉に行く事になりました。

コルベールさんは頭がフサフサでニコニコしておられます。

今、この瞬間にメンヌベルに殺されても笑いながら逝けそうですね。ツルペタツンデレ桃髪は、ワテ等に付いて来ながらも、何で私の胸

を・・・。

とブツブツ呟いています。

アーアー、聞こえません。

またオスマンと遭うのか・・・。

今度の人生はもう好きに生きる。
行き当たりバッタリで生きます。

キモ男さん、再び。(後書き)

本作は原作とは殆ど話の筋が変わります。

一応、原作に従い話を進めますが、キャラは別物となります。

原作崩壊となりますので、原作萌えの方は見ない事をお勧めします。

変態校長とキモ男さん♪(前書き)

オスマンとの対決です。

変態校長とキモ男さん♪

「ヒマじゃのおお。」

「オールド・オスマン。」

ヒマだからと言って私のお尻を撫でるのは止めて貰えませんか？」

「いい天気じゃのおお。」

「ボケたフリしてもダメです。」

その手をどけてください。」

「真実はどこにあるのかのおお。」

「少なくとも私のスカートの中にはありません。
机の下にネズミを忍ばせるのは止めて下さい。」

「モートソグニル。気を許せる友達はお前だけじゃ。
オスマンはネズミにナッツを与え齧らせている。」

「そうかそうか。もっと欲しいか。ほれやるぞ。」

所で今日の下着はナニ色じゃった？」

チュウチュウとネズミが何やら言ってる。

「そうか、白か。たまにはショッキングピンクとか黒も良いがお。
今度秘書経費で下着を・・・。」

オスマンは最後まで言えずにロングビルからアッパーカットを食ら

つてた。

「ナ、ナイスパンチじゃ。ぐふっ・・・。」

「オールド・オスマン変態校長、今度やったら・・・。
コレでは済ませませんわ・・・。」

ロングビルは両手を組み合わせバキバキと指を鳴らせてる。
オスマンは首をカクカクと震わせ、イエス・マムと答えるのみだった・・・。

タロウです。

いよいよやって参りました。

この世界最強の変態。

オールド・オスマンの居る校長室です。ハイ。

でも避けてはいけません。

ヤツを避けるとマチルダ姉さんと知り合う事が出来なくなります。
今回も土くれのフーケは出しませんよ。エエ。

テファのためにもね。

「オスマン校長、コルベールです。
召還の儀式でトラブルが出ましたので、ご相談に上がりました。」

「コルベール君か？
良からう、入りたまえ。」

オスマンの許可が出たので、コルベール、ルイズ、そしてオラが校長室に入る。
中にはロングビルさんこと、マチルダさん、オスマンが居た。

「そこの方はどなたかな？」

「オスマン校長、彼は異国の凄いメイジです。
見てください。私のこの頭を・・・。」

オスマンは目を見開いて驚いてた。
あまり男の顔は見ないので、気づかなかったが、ピカピカ頭がフサフサとなってるのだ。
そりゃ驚くってモンです。

「ツルベール君がフサフサ君になつとる。
どうしたのだ？その頭は。
悪いモノでも拾って食べたか？」

「ココにいらっしゃるタロウ・ヤマダ様の魔法でこうなったのです。
嗚呼、若き日の私の頭が蘇るとは・・・。」

オスマンはコルベールの頭を触ったり毛を抜いたりして確かめてた。

「痛いではありませんか。校長。」

「スマンスマン。ホンモノか確かめて見たくてのお。
だが毛根もある。まさにホンモノだ。」

「この方ですが、ルイズ嬢の召還の儀式でこのハルケギニアに呼び
寄せられたそうです。

異国の魔法学院で教鞭を取られてたそうですよ。
素晴らしいメイジです。」

「フム……。確かにコルベール君の頭が自毛になってる。
昨日までは光輝く寂しい頭だったのだがお。

おお、挨拶が遅れてたが私がこのトリスティン魔法学院の校長、
オールド・オスマンじゃ。貴殿の名を宜しければ教えて頂けぬか？」

「始めまして。

ニホンと言う国で教師をしていましたタロウ・ヤマダと言います。
趣味は魔法と・・・色々です。」

「色々と言うのも気がかりだが・・・。
して、貴殿はどうしたいのじゃ？」

「まず帰る方法が分るまでの生活保障をお願いします。

使い魔にはさすがになれませんが、代わりにルイズ嬢には使い魔の
代わりとなる

異界の動物を進呈致します。」

「へ??? 私に使い魔となる動物をくれるの?」

「人間の使い魔よりは勝手が良いでしょ？ ルイズ嬢。」

「そりゃそうだけど。でもドコに居るのよ。」

「後で召還したるで待て。小童。」

して・・。そこにいらっしやる美しいおぜう様。

貴女様からは何か悲しい波動を感じるのですが。

もしかしてイヤな事を無理強いされていませんか？」

「へ??? 私ですか？」

「ハイ。メガネをかけた美しい年頃のおぜう様は貴女だけです。この場では。」

「ま、嬉しい事を。でもどうして私から悲しい波動を感じるのですか？」

「私の世界には「セクハラ」と言う女性に痴漢行為をする男性が後を絶たないのです。

女性をモノ扱いして、勝手な事ばかり無理強いして逮捕される連中も多々。

そう言う被害に遭われてる女性と同じ悲しみが貴女から感じられるのです。」

「ま、お優しい事を。そうですね・・・。」

ロングビルは黙ってオスマンの方をジロリと睨みつけている。

「ナルホド・・・。恐らく秘書と言う弱い立場の貴女にヒヒジイが無理やりセクハラを

しているんですね。分りました。
貴女の苦しみをヒヒジジイにも味わせてあげましょう。少しお耳を
拝借して宜しいですか？」

ロングビルはハイと言うとタロウの口元に耳を傾ける。
オスマンは何やら怪しい雲行きとなり汗ダラダラ・・・。

「フフフフ。面白い事ですわね。
分りました。タロウ・ヤマダ様、お任せします。」

「ラジャです。では・・・。
オールド・オスマン。立ていい。」

気合を入れた声を上げると、オスマンは自分の意思とは別に直立不
動の姿勢を取らされた。

「な、ナニが始まるのじゃ。」

「楽しい事ですよ♪」

オレは即席魔法、セクハラチェンジを唱える・・・。
すると・・・。

オスマンの立ってた位置には十六位の見目麗しい女性が。
そしてロングビルさんの立ってた位置には逞しい男性が。

「ロングビルさん、彼女に女性のイヤな事を散々味わせてください。
オスマンちゃん、頑張って耐えてね♪」

「わ、ワシがおんにゃの子に・・・わーい。触り放題だ～～い。」

オスマンは喜んでいるが、それからが地獄の始まりだ。

男性にあるべきイチモツも消えているのに自分にセクハラしても痛いだけ。

そしてキモチワルイのだ。

ロングビル氏はオスマンコちゃんに近づくと・・・。

「オスマンコちゃん、カワイイわね。ゲヘゲヘゲ・・・。」

と、鼻息も荒く近づき、触るわ、叩くわ、揉むわとムチャクチャしまくり。

オスマンコも最初は喜んでたが、段々恐怖に変わり・・・。

「もうイヤ～～～，元に戻してえええ。。。」

「ダ・メ・です。女性のセクハラのはげしさはこの程度ではありませんわんわ。」

私、イヤ今はボクの苦しみを思い知れええ。」

ロングビル氏は更にオスマンコに触る触る。

仕舞いには彼女は失禁してしまい悶絶して気絶。

「ふう・・・この程度で良いわね。」

タロウ様、ありがとうございます。そろそろ元に戻して頂けます？」

「ラジャです。」

オレはセクハラチェンジを解いて、オスマンとロングビルさんを元に戻す。

オスマンは下半身ズブ濡れで気絶してるが、汚いので始末だけはしておいた。

そして活を入れ、オスマンを正気にすると・・・。

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ・・・。」

と正座して土下座を始めた。

余話怖かったのだろう。

世の女性はこんな恐怖を毎日の様に味わってるのだ。

痴漢に憧れてる男性諸君。

痴漢で感じる女性なんて皆無に近いんだからね。

お近づきになりたいなら、キチンと口説いてください。

フラれたら諦めるのですよ♪

さて・・・。

オスマンに対するオシオキは終わったので交渉再開です。

「オスマン殿、自分は今、見せたみたいな魔法のほかに色々とい事が出来ます。

ええ、色々だね。」

オスマンは恐怖のため、まだガクブルしてる。

フフフ・・・。

いくら長生きしようが、おんにゃの子になる経験だけは皆無だったろう。

ザマーですよ。

ロングビルさんも元の女性の形態に戻り、勝ち誇った顔をしております。

「わ、分かりました。タロウ・ヤマダ殿。

もう二度とセクハラはしません。

女性の嫌がる事は絶対にしません。

お許しを・・・。」

「オスマン殿、女性に対するセクハラの恐怖、良く分ったでしょ。二度としてはいけません。今度したら・・・。幼女にしてスラム街に放置しまっせ。」

「もう懲りました。ワシは男のジジイで結構です。お触りしたい時は、お金を払ってンナ店に行きます。」

「宜しい。じゃ、交渉再開と逝きましょうか♪」

そっからはコッチのペースでした。始めっから相手の度肝を抜いたので、もう言いなり。仕事はココの学院の教師に赴任。

一応、全系統が使えるので、手抜き教師を叩き潰して後釜に座る事にしました。

寢床は自分で建てるので、学院内に空き地を貰います。

食事は学院の教師と共に頂く予定です。

ルイズ嬢の使い魔は明日、校長室で召還する事にしました。ナニを召還したろうかな・・・。

ま、疲れたので今宵は食事をメイドさんに運んで貰い、貴賓室に休ませて貰いました。

チャンチャン♪

変態校長とキモ男さん♪（後書き）

オスマンコちゃんとロングビル氏の絡み、いかがでしたでしょ。
痴漢はいかんですよ。皆様。

どうしても女性に近づきたい非リア充の皆様は金を払っていかがわしいお店へ。

マチルダさんとキモ男さん（前書き）

マチルダを引き込みます。

マチルダさんとキモ男さん

タロウです。

オスマンとの交渉を終えたオラはロングビルさんの案内で、貴賓室へと向かっています。

「タロウ様、今日はとても楽しい体験をさせて頂きました。本当に感謝しております。」

「ロングビルさん、世の女性の大半はンナヒヒジジイの手籠めにされてるのですよね。」

女性は好きな男性のみに身体と心を預けるべきなのに、立場を利用し、

イヤな事をするヤツは後を絶ちません。

もし困った事があれば相談して下さい。

ヤローの相談は、あまり聞きたくありませんが、麗しい女性の相談は最優先でお聞きします。」

「ま、本当にダンディなのです。タロウ様。

分かりました。また何かありましたら是非、ご相談させてください。」

その時、オレは周囲に誰も居ないのを感知してから彼女にボソリと呟いた。

「マチルダさん、土くれのフーケだけは絶対に止めてください。妹が悲しむ事になりますよ・・・。」

それまで温和だった彼女の態度が瞬間的に氷点下に落ちた。

「どこで知ったのかい？」

「私はこの世界は二度目なのです。試しに言いましょか？
ウエストウッド村の山林の中に孤児と住む彼女の名は・・・」

「分った、信じましょう。でもどうしてンナ事を私に告げるの？」

「テファを悲しませたくないからですよ。

貴女は絶対に捕まらないと信じてドロをしてるでしょうが、世の中には絶対と

言う事はありません。悪い事してたら必ずお縄になります。

そして前世では私の妻だった貴女を不幸にしたくは無いです。」

「わ、私が妻だったって？アンタと・・・？」

「ハイ。信じられないでしょうが、事実です。

この世界は不思議な事です、輪廻の繰り返しを行ってるみたいで
す。

その証拠をお見せしましょう。アクア姉さん・・・」

小さい声で呼んだにも関わらず、アクアさんが参上です。

「呼んだか？我が盟友、タロウよ。」

「以前、私がこの世界に居たのは何年位前ですか？」

「もう数えるのもバカバかしい程、昔の事だ。

人間の年月で言うと二千年は経過してるだろう。

お前が消えてからは、我は面白いヤツが居ず、ラグトリアン湖で引き籠もっておった。」

「だ、そうですよ。マチルダさん♪」

マチルダは目の前に居る存在が、普通の霊とかモノでは無い事は理解出来てた。

だが、この存在が何なのか・・・。
理解出来ないで居た。

「あの・・・貴方様は・・・。」

「我はお前達、単なるモノが言う、水の精霊なり。
我はタロウ・ヤマダとは古くからの盟友なり・・・。」

マチルダはアゴが落ちそうになってたが、もう信じるしか無かった。
目の前の存在はまさに精霊そのものなのだから。

「失礼な事を質問してお許しください。

私はタロウ様の僕となるマチルダ・サウスゴードと言います。」

「フム・・・お前はタロウの僕となるのか？」

「ハイ。私はタロウ様に色々と助けて頂きました。

ご恩を返すには私の些細な人生を預けるしかありません。
どうか私の存在を認めてください。」

「良からう、お前を単なるモノからタロウの僕、マチルダとして認識しておこう。

くれぐれもタロウを裏切るで無いぞ。」

「モチロンです。水の精霊様。」

「タロウ、このモノに私の秘薬を与えておく。日々の暮らしの糧の足しにはなるであろう。」

「ありがとうございます。精霊様。」

また遊びに行きますので、お待ちください。」

「また以前の如く、池のある家を早く持て。」

私もそこに移動したいぞ。」

「もう少しお待ちくださいね。自宅を持ちましたら必ず池を作りますので。」

「楽しみに待つとしよう。では・・・。」

そう言われると水の精霊様はブシュッと消えてしまいました。マチルダの手元には大量の水の秘薬が瓶に入ってます・・・。

「こ、こんな大量の秘薬なんて・・・。凄いお金になります。」

「良かったね。マチルダさん。」

それを換金してテファの仕送りの足しにしてください。」

「数年は大丈夫ですよ。こんだけあれば。」

ああ、もちろんアレは廃業します。」

「それが良いですよ。あ、部屋はココですよ。ね。じゃお休みなさい・・・。」

オラは部屋に入ろうとすると、マチルダさん、ガシッとオラの腕を

掴んで放しません。
どったの??

「タロウ様、私は貴方の僕となったのですよ。
私のすべては貴方のモノ。何故離れようとするのですか・・・。」

ヤバ・・・。

ヤンデレ化が始まってる。

前世の時もこの目になったら、逆らう事が出来なかったのら。
しかし、着いたその夜に女性を部屋に引き込むのはさすがに・・・。
それに腹が減りました。シクシク・・・。

そいから仕方ナシに彼女の言うがママに自分の部屋に入り・・・。

ゲフンゲフン・・・。

お子様には知らせたく無い事になりました。
腹がグーグー鳴ったので、手元のカバンに残ってたポテチを食べて
たら、
彼女に奪われたのは言うまでもありません。

・・・。。。。。

そうだ♪

オラはネ申様から魔法に関してはチートにして貰ったのら。
腹が減ったなら、食べ物を魔法で何とかデキネか？
試して見ます。

「カップメンと箸、ついでにカセットコンロとボンベ出ろー!!」
出ましたよ。すべて・・・。

マチルダさんもビックラしてますが、食べ方が分らないので目を白黒させてるだけです。

オラは腹ペコタヌキなので、ヤカンに水を足し、コンロでお湯を沸かします。

そしてカップメンにお湯を足し・・・。

三分待つと・・・。

おおおお。ビバ、カップメン♪

マチルダにも食べ方を教え、一緒にズルズルと食べます。

彼女は初体験のカップメンに感激し、シナ美味しいの初めて♪と大騒ぎです。

腹が膨れたので寝ようとする・・・。

狼さんに食われてしまい明け方まで寝かして貰えませんでした。シクシク。

寝不足でも水魔法で何とか出来てしまう自分が悲しいっす。

翌日、彼女は肌がツヤツヤしてたのは言うまでもありません。

マチルダさんとキモ男さん（後書き）

ギリギリR15です。

マチルダさんはタロウの僕となりました。

シエスタさんとキモ男さん（前書き）

ようやくシエスタさんと出会います。

シエスタさんとキモ男さん

タロウです。

マチルダさんは夜明け前に自分の部屋に帰りました。

ええ、さすがに昨日と同じ服では不味い、と、帰ったのです。

私は彼女が部屋を出ると同時に部屋の換気を始めました。

男と女のアレの匂いつてかなり籠るのですよ。

風魔法ですべての空気を外に出し、部屋の空気はスツキリです。

さて・・・。

着替えが無い事によく気づきました。

今、着てるのは何故かスーツ・・・。

パジャマ代わりのジャージは所持してますが、下着がありません。

困りました・・・。

何とかしないといけません。

ぐうううう~~~~。。。

オラの腹の音です。

昨日はカップメンしか食べてませんからね。

そろそろマヂで胃袋様に本格的に補充してやらないとかなり不味い
っス。

昨日はゲフンゲフンな事ばかりで肝心な事を頼んでおくのも忘れて
ました。

どうするべ・・・。

悩んでると、部屋のドアをノックする音が・・・。

「どうぞ。開いてますよ。」

「失礼致します。コチラはタロウ・ヤマダ様のお部屋ですね？」

「その通りです。どちら様ですか？」

「学院のメイド、シエスタと申します。朝のお食事をお持ちしました。」

おお、シエスタさんキタ〜〜〜♪

マチルダさんに続く私の元奥様。

やはりこの世界は輪廻して繰り返してますな。

ですが、何もかも前世と同じに動いては面白くありません。

今回は成り行き任せと決めています。キリッ。

「ありがとうございます。どうぞお入りください。」

シエスタは了承を得ると台車に乗せた食事を部屋に運び込む。

・・・・・・。

ワイワイ、ナニ???この膨大な量は・・・。

またメタボに戻す気かよ・・・。

台車の上には朝食にしては膨大な量の食事が乗せられています。

聞くと、これが貴族の方の朝食一人前だそうです。

あのジジイ、よほど怖かったのか、オラの扱いが前世とはケタが違います。

やはり変態は叩くに限りますね。ウン。

「シエスタさん、私一人では片付ける事が出来ません。」

もし朝食がまだならご一緒にいかがです？」

シエスタはアワアワと慌てて、ご迷惑で無ければ・・・と、了承してくれました。

それから楽しいランチタイムです。

やはり元のシエスタと同じ人格らしく、記憶とすべてリンクしています。

しかし見ると手荒れが凄いです。

洗濯機も無い、この世界ですから洗濯は当然、手作業。

荒れるのは当然でしょう。

見かねたオラは彼女の了解を得てから、手荒れを魔法で癒してしまいました。

すると、アラ不思議・・・。

彼女の荒れてた手の肌は赤ちゃんみたいにスベスベで綺麗になりました。

「こ、こんな事をして頂いて、宜しいのですか？」

「あ？」

いいえ。こんなの自分には造作も無い事です。

何でしたら手荒れの惨いメイドさんを全員連れて来て頂いても結構ですよ。

女性が荒れた手をしてるのは人類の損失です。

後でハンドクリームを作りますので、仕事の後に塗る習慣を付けてください。」

彼女は感激して、私に出きる仕事はすべてお任せください、と、直立不動の姿勢で

私に敬礼してくれます。

ドコで覚えたの？海軍式の敬礼。

まあハンドクリーム程度なら、今すぐでも作れます。

イメージさえ出来れば大概の事は出きるのですよ。

私は。

ただ、女性の下着とかは想像の埒外です。

お食事の後に人数分のハンドクリームを創造してあげ、彼女に手渡します。

「こ、こんなに……。私たちの給与ではこんな秘薬の代金は払えません。」

どうすれば……。」「

「お金なんか要りませんよ。貴方達は学院のために働いてるのです。自分も本日から学院で働く、言わば同僚。同僚の健康維持も仕事の一環ですよ。」

そう言う彼女は喜んで受け取ってくれました。

後に聞くと、彼女の同僚も凄い手荒れに悩んでたとか……。

クリームを塗り始めたら、全員がアカギレから開放されたそうです。良かった良かった♪

シエスタさんとのファーストコンタクトはこの程度にしておきましょう。

いくら何でも始めからゲブンゲブンな関係はあり得ません。

いえ、ありました。が例外としておきます……。

シエスタさんと別れ、部屋の外をブラブラと散歩する事にします。忘れてましたが、私の魔法は一応、杖を使っています。

ホントはイメージしてるだけなのですがね。

それでも魔力が枯渇しないのですから、ネ申様。どんだけ魔力をプレゼントしてくれたのですか？

学院の閑静な木陰を見ると、タバサさんが本を読んでおられます。相変わらずクーデレしているんですね。

ま、今は関わらない事にします。

ボチボチ学院の生徒もアルウィーズ食堂で朝食を食べ始めたらしく、生徒で賑わっています。

オラは食べたので、行きませんが・・・。

当座の着替えが無いので、オスマンに談判に行く事にしました。

「オスマン校長、おはようございます。タロウです。」

「タ、タロウ殿か。セクハラはしてませんぞ。エエ。」

もう二度としませんぞ。エエ・・・。」

「別に問い詰めに来たものではありませんが・・・。

ま、良い傾向です。

所で・・・。」

端折りましたが、下着と着替えは大至急部屋に届けてくれるそうです。

ついでに支度金として、相当の金子を袋入りでドカンと置いてくれました。

今日の予定は授業の見学、ルイズの使い魔の召還などです。

授業は手拔きのアホ教師が居たら潰してOKと許可を貰います。

万一に備え、オスマンのサイン入り許可証も発行して貰いました。こんな変態でも学院のトップです。

大切に使いましょう。

オスマンと別れ、自分の居室である貴賓室に帰るとシエスタが下着等を持って待っていました。

「タロウ・ヤマダ様、オールド・オスマン校長の指示がありましたので、着替えなどをお持ちしました。」

「ありがとうございます。シエスタさん。では着替えますので、その服を頂けますか？」

「裾合わせがありますので私が調整します。裁縫道具も持参してますわ。」

見ると、裁縫セットもドカンと置いてあります。

「……分りました。では……。」

シエスタを伴い部屋に入り、まずは下着を着替えます。

もちろん彼女には向こうを向いて貰っていますよ。

まだ彼女は清い乙女なのです……。

そして上着を着てズボンを履きます。

やはり少し裾が長いですね。

「シエスタさん、着替えました。」

「やはり調整が必要ですね。では裾を合わせますので、任せてください。」

彼女はそう言うと、オラの足元にしゃがみこみ、裾を合わせてくれます。

←を見ると……。

ゲフンゲフン。

彼女の双壁の谷間が見えます。

ええ、偶然見ただけですよ。絶対にガン見はしてません。それに昨日は散々ゲフンゲフンな事は済ませています。

ですので冷静ですよ。エエ・・・。

後に彼女と深い仲となってから聴くと・・・。

狙ってたそうです。自分が谷間を覗く事を。

女性はターゲットを定めると攻撃に入るのが早いですね。

男には真似出来ません。

後に私はそう述懐しております。

裾あわせは十分程度で終わりました。

さすがプロです。ハイ。

ミシンも無いのに、この技術。

・・・ミシンか・・・。

彼女と暮らしてた時、彼女には色々洋服を縫って貰いました。

あの時は創造魔法が使えなかったので、手縫いをお願いしてましたが。

ついホロリと思い出してしまいました。

すると・・・。

目の前に足踏み式の旧式ミシンがデンと出現したのです。

想像しただけなのですよ。

自分も驚きました。

「あ、あのおお。タロウ様、コレは何でしょう??」

「私の世界の古い形式のミシンと言う足で踏む事で衣服を縫い合わせる事の出きる機械です。」

オラはシエスタに使い道を教えてあげました。

「素晴らしいですわ。こんな機械があれば服を縫うのも簡単に出来ます。」

「では貴女に差し上げますよ。自分が所持してても意味はありませんから。」

「こんな高価な品物、頂けません。今朝の秘薬の代金も払えないのに。」

「アレは御近づきのプレゼントですよ。代金は結構と言ったでしょう。そうですね・・・。」

ではこうしましょう。このミシンで色々と服や下着を縫って下さい。

もちろん私以外の方の服もOKですよ。

それで代金は帳消しとします。

いかがです？シエスタさん。」

「・・・分りました。

ではお預かりしてタロウ・ヤマダ様の服や下着は私に任せてください。

ご満足頂ける品物を作りますので。」

「楽しみにしてますよ。ああ、そう言えばコレを運ぶのも大変ですね。

私の魔法でシエスタさんの部屋に転移させますので、私の手を握って部屋を

思い浮かべてください。

目は瞑ってくださいね。」

彼女は私の指示に従い、手を握って目を瞑ってくれました。
次の瞬間。

一瞬で彼女の部屋に転移・・・。

同僚のメイドさんがビックラしたのはお約束です。

シエスタさんとキモ男さん（後書き）

シエスタとの出会いです。

まだゲフンゲフンな関係は考えてませんよ。

ええ、彼は鬼畜ではありません。

変態ですが・・・。

風ヲタとキモ男（前書き）

風男との対峙の巻きです。

風ヲタとキモ男

着替えた服の洗濯などをシエスタに頼み、オラは授業の見学をするべく職員室に向いました。

丁度オスマンも職員室に来てたので、彼にオラの説明をして貰います。

「職員諸君、今日から我が学院の教師として赴任して頂く事になった異国のメイジ。

タロウ・ヤマダ殿です。

彼の魔法の腕はこのオスマンが保障する。

彼には得意の魔法はすべてと言われるので、彼に自分の受け持ちは自分で決めて頂く事になった。

諸君の中で手抜き授業をしてる方が居たら最優先で解雇する事に決まった。

そんな職員が居ない事を願うがね・・・」

職員はオスマンの一言でザワザワと騒ぎ出した。

新規の職員が入るのは良いが、解雇される人間が出る・・・。

今まで生温い仕事をしてた彼等は真っ青となった。

「始めまして。私は異国の魔法学園で教鞭を取ってましたタロウ・ヤマダと申します。

何分にもこの国の常識に疎いと思いますので色々とお世話になると思います。

ヨロシク♪」

何故か彼等からスルーされましたが、歓迎されていないのは当然です。

ま、誰を切るかはオラの一言ですので、楽しみにしてしましょ。
最初の授業はルイズのクラスです。

教師は風ジャンキーのミスタ・ギトー。

この世界でも風最強と騒いでいるのでしょね。

まずはヤツを切りますか・・・。

「では授業を始める。

今日は異国のメイジとか言うタロウ・ヤマダ殿が居られるので彼に
模擬魔法を

見せて貰うとしよう。

タロウ・ヤマダ殿、お願い出きるか？」

いきなり話を振られたが、ま、予想してましたので落ち着いて返答
致します。

「分かりました。

皆様、始めまして。

異国の魔法学院で教鞭を取っていましたタロウ・ヤマダと言います。
今日はミスタ・ギトー殿から模範魔法を見せてくれと頼まれました
ので、

皆様にお見せしましょう。

ですが・・・、ココでは少し不味いですね。

ギトー殿、野外に移動しても宜しいですか？」

「構わぬが・・・。では諸君、野外に移動する。
ヴェストリの広場に移動しよう。」

ギトーがそう言う生徒は全員席を立ち広場へと移動を始めた。
オレはギトーと並んで歩き、彼と少し話をしてた。

「タロー殿、どう言う魔法を見せてくれるのですか？」

「そうですね。教室では部屋を破壊してしまうと思いましたが、室外に移動して貰いましたから、私の作るゴーレムをギトー殿の得意な魔法で破壊すると言うのはいかがでしょ？」

「ほほお。それは楽しそうですね。私の風を見せて差し上げます。」

「楽しみにしてます♪」

やがて学院の外れにあるヴェストリの広場に着くと、生徒に安全な場所に固まって見学して貰い、オレはゴーレムを練成した。

形は・・・

そう、子供時代に熱中した日本独自のスーパーロボット。

どこかの国がテコンとか言う捏造品を作ったが、世界の子供が支持した・・・

マ○ンガーZです。

「いかがでしょ？私の作った最強のゴーレムです。」

「な、中々強そうですね。ですが私の風には残骸となり果てるのが見えております。」

「もう攻撃して結構ですよ。いくらでも攻撃してください。」

ギトーはオレの話が終わると同時に偏在を作りカッタートルネードやタイフーン、

その他自分の持つ魔法を全力でぶつけてた。

だが……。

「な、何故壊れぬ。

私の風は最強のハズだ。」

「……愚かですね。自分の能力こそが最強と信じるのは自由ですが、

他人に押し付けるのはいかがかな？と思います。

このゴーレムは超合金と言う最強の鉄で練成されています。

マグマの中でも解けぬ強度があります。

この程度では破壊するのは不可能ですよ♪」

「……。それならタロウ殿、貴殿に決闘を申し込む。

種目は風同士で望む。」

「……。構いませんが、もし敗れたらどうするのですか？」

「敗れたら私は辞職する。恥を晒してまで働く気は無い。」

言いましたよ。この方。

すべての生徒が居る中で……。

良いでしょう。

貴方の最後の授業、派手に散らしてあげます。

決闘前にギトーに怪我や被害は敗北者の負担とする、などの取り決めも行います。

さて……。

殺りますか……。

自分と生徒に被害が及ばない様にシールド魔法を施しておきます。

コレはアニメに良く出るバリアーをイメージしました。
試しに生徒に向けて軽い火炎弾をブチ込みます。
ウム……。彼等には埃ひとつ付きません。

さてギトー君を殺りますか……。

「ギトー殿、先程同様に貴殿に優先権を与えます。
私にいくらでも攻撃を仕掛けてください。」

ギトーはオラに向けて色んな攻撃を開始しました。
バリアを張ってるので、全く届きません。

十分は攻撃が続けたでしょうか……。

彼は魔力が枯渴したみたいで、攻撃を止めてしまいました。

「おや、もう終わりですか？
まだお茶も飲み終わっていないのに。」

そう、オラはギトーの攻撃の最中に紅茶をクリエイトし、ティータイムを楽しんでいたのです。

ギトーはフヌヌヌ……、と面白い顔をしています。

「それでは私の番ですね。しっかりと防御してくださいよ。」

「チョッ、待て。私は魔力が尽きてるのだ。」

「知りません。ゴーレムと決闘で優先権はすべて渡したのです。
今度は私のターンです♪」

ギトーに向けて氷点下の風をイメージした烈風魔法を彼に浴びせます。

もちろん死なない程度に加減しましたけどね♪

二撃程度加えたらヤツはピクリとも動かなくなりました。

何だ。

コレで終わりですか・・・。

生徒に彼の救出を頼み私は校長室へと・・・。

「オスマン殿、遠視の魔法で見てたと思いますからご存知とは思いますが、

ギトー殿から決闘を申し込まれ、彼は負傷。

ああ、決闘前の彼から敗北したら辞職すると言質を頂いておりますので、

負傷の治癒が終わり次第叩き出してください。

あんな決闘ジャンキーは生徒を教える資格はありませんな。」

「そ、そうですね。タロウ殿。ハハハハ・・・。

分りました。ギトー殿は自己都合の退職として処理します。」

オラはオスマンの部屋から出ると生徒の待つヴェストリの広場へと移動した。

それも一瞬でね。

彼等はギトーを保健室に放り込むとココで待機してたのら。

「生徒諸君、ギトー殿の看護ありがとうございます。

彼は先程の言質通り、辞職となりました。

さて、コレでは君達の授業が進みませんので、このタロウ・ヤマダが風の模範を示します。

まず、風の基本、ウインドから・・・。」

前世で烈風のオカンとも対峙してますので、風は徹底的に魂に仕込

まれています。

今ならオカンでも叩き潰す自信ありまっせ。

何せ魔力がハンパではありません。

もっとも生徒の彼等にはムチャな事は教えませんよ。エエ・・・。

（な、何なの・・・あのタロウの魔法は・・・。

ギトー先生の風は私の母のカーリヌよりは威力は少ないとは言え、普通なら即死レベルの

魔法だったわ。それなのに、攻撃を受けてても平気な顔してたし、あげくには・・・。

お茶を飲んだのよ。冗談でしょ???）

ルイズは自分が召還した彼のムチャぶりに頭が沸いてしまったのだ。

風ヲタとキモ男（後書き）

ギトー、お前の事は。。。。

忘れます♪

ギトー解雇編でした。

ギーシュ君とキモ男君♪(前書き)

ようやく皆のオモチャ、ギーシュ君、爆登場です。

ギーシュ君とキモ男君♪

ボクの名前はギーシュ・ド・グラモン。

グラモン家の四男坊だ。

薔薇のギーシュとでも呼んでくれたまえ。

多くのレデエがボクを支えてくれるだろう。

さて、今日の授業は中々のモノだった。

アノ、ギトー殿と見慣れぬメイジ教師、タロー・ヤマダ殿の決闘だったのだ。

決闘はタロー殿の勝利だった。

ギトー先生は辞職されるそうだが、自分で言ったのだから後悔は無いだろう。

それよりも・・・。

土メイジの自分としては、あのゴーレムだ。

タロー殿の作り上げたゴーレムにはボクは感動した。

ギトー先生の繰り出す風魔法をすべて受け止めて、傷一つ付かない最強のゴーレム。

防御ばかりだったので、攻撃力を見ていないが・・・。

もし攻撃を見れるなら、どうなるか・・・。

楽しみだ。

授業が終わり、解散と言う事になったのでボクは彼の元に近づき質問した。

「タロー・ヤマダ先生、先程の授業は素晴らしかったです。所で・・・。」

「ン？ああ、何か聴きたい事でもあるのかな？
んっと、名前は・・・。」

知ってるけど一応聞いておかないとね♪

「ギーシュ・ド・グラモンと言います。

得意の魔法は土魔法です。まだドットですが・・・。」

「ギーシュ君と呼んで良いか？タロウ・ヤマダです。ヨロシク。」

一応フレンドリーに握手を求めます。

「タロウ先生と呼びますね。ヨロシクお願いします。

質問と言いますか、見せて欲しい事があるのです。」

「何でしょう・・・。」

「先生の作り上げたゴーレムの攻撃方法を見たいのです。」

「フム・・・。先程の授業では防御ばかりでしたからね。

攻撃方法は色々とありますよ。エエ、色々とね♪」

「そ、そうですか・・・。

でしたら課外授業として見せて頂く事は出来ませんか？」

「良いですよ。ただ攻撃するのを見せても納得出来ないと思いますので・・・。

ギーシュ君、キミの作るゴーレムを破壊して見せます。

四種類の攻撃方法が出ますので四体のゴーレムをキミの持つ魔力をこめて、

頑強に作り上げてください。

準備が出来たら、一体ずつ攻撃します。」

「分りました。所でボクのゴーレムから攻撃しても？」

「モチロンOKですよ。カカシでは何の意味もありません。」

分りました、とギーシュが言うと、

彼は全魔力を込めて薔薇の杖でゴーレムを練成し始めました。
相変わらずのワルキューレですな。

それでも昔の彼のゴーレムよりは頑丈そうです。

最初から4体と決めたせいもあるとは思いますが・・。

「準備は出来ましたか？ギーシュ君。」

「大丈夫です。」

ボクの作れる最強のワルキューレとして念入りに作りました。」

・・・・・・。

そうですね。

昔の彼のワルキューレよりは強そうです。

まあ良いでしょう。

では遊びましょうか。

「ギーシュ君、キミのゴーレムから私のゴーレムに攻撃を仕掛けた
まえ。」

五分はキミのターンだ。五分したら反撃を開始する。」

「わ、分りました。タロウ先生。」

そっからはギーシュは必死でゴーレムを操りマジ○ガーを叩く、蹴
る。

刀で刺すと色々と攻撃しました。

ええ、すべてカンカンと軽い音がするだけで傷も付きません。当然です。マジン〇ーZはスーパロボット。

この程度で傷が付くのはあり得ません。

相手出きるのはアシュ〇男爵が率いる奇怪獣軍団だけですよ。

「・・・。五分経ちましたね。

では私のターンとします。

ギーシュ君、ゴーレムが傷つくといけませんので分散させて移動始めてください。」

彼は私の指示に従い、ゴーレムを全力で走らせています。まずは・・・。

「ロケットパーンチ。」

そう、当時の良い子の皆が度肝を抜かれたアレです。

腕が外れ、轟音を上げてワルキューレに飛び掛ります。

どごーん♪

一撃で粉砕。

ま、この程度は当然ですな♪

「ナ・ナ・ナ・ナ・何ですか？それは・・・。」

「ロケットパンチと言います。腕が飛び相手を粉砕する攻撃ですよ。まだまだ続きます。さあ逝きますよ♪」

それからハリストハリケーン、光子力ビーム、そして・・・。

「ブレストファイヤー♪」

ギーシュは真っ青です。

彼のワルキューレ君は最後のブレストファイヤーですべてドロドロに溶けてしまいました。

生徒は全員、このイベントを見学してて固まってました。

「……ボ・ボクのワルキューレが……。」

「……ギーシュ君、これで課外授業は終わりとなります。後片付けは頼んでおきますよ。」

放心してる彼を放置して、オラは職員室へと引き上げます。

イジメでしたね。これは……。

生徒達は放心してるギーシュを放置して全員、昼ごはんを食べるために食堂へと

引き上げてしまいました。

ギーシュは数時間、その場で固まってたとか……。

「……ボ・ボクのワルキューレがあああああ……。」

ギーシュ君とキモ男君♪（後書き）

ギーシュとのイベントは形を変えて行いました。
今宵の更新はココまでとします。

職員室にて・・・(前書き)

ついでにキモ男のキモ男たるべき話を。

全然キモク無いチートじゃんと思ってる方。

キモ男は変わっていません。

変態ヲタですよ。

職員室にて・・・。

タロウでっす♪

ギーシュとのイベントを形変えてしまいましたが、アレは迷惑なイベントなので、

ま、ヨシとしましょ。

さて、お昼はどうしましょう。

あの騒ぎの後ですし、アルウィーズに行くと大騒ぎになると思います・・・。

シエスタを見かけたので、彼女に厨房に案内して貰いますか・・・。

「シエスタさん♪」<ソコのギャラリィ、キモツとか言わないでね。キモ男ですが・・・。

「アラ？タロー様、今朝は色々ありがとうございます♪」

シエスタさん、ご機嫌ですね。

「どう致しまして。所でお願いがあるのですが。」

「何でしょう。私に出きる事なら何でも致します。」

ええ、何・で・も・ね・♪」

オラはこの何でもと言うのが文字通り、何でもを意味してるとは気づいていなかったのです。

シエスタさんは既に肉食獣のスイッチが入っていたのですよ。

ガクブル・・・。

「色々とやらかしてしましまして、食堂で食べるのがアレなんですよ。」

で、量も多いので出来ましたら厨房の方の賄いを頂けないかと思いまして。」

「アラ？そんな事で宜しいのですか。」

でしたら私が調理人のマルトーさんに頼んであげますわ♪」

おお、マルトーのオヤジも居たか・・・。

彼は好きなキャラなんですよ。

シエスタの案内で訪れた厨房はかつての厨房と変わっていません。中に居るメンツもかつてのままです。

懐かしいですね・・・。

色々と世話になりましたから。

少しホロリとした感傷に浸っていると、シエスタが怪訝に思ったのか質問して来ました。

「タロー様、ココが厨房ですよ。」

「あ、ああ、そうですか。いい匂いがするなと思ってたトコです。」

「・・・そうですか。では入りましょう。」

シエスタの先導で厨房に入るとマルトーを始めとする厨房の料理人達が、

デザート製作に大忙しでした。

いいのかしら・・・。

こんな時に来て・・・。

「マルトーさん、この方がタロー・ヤマダ様です。お昼はコチラの賄いを出して欲しいそうですが。」

「ん？おお、アンタがあのギトーを叩き出してくれた新任の教師か？今、オレ達の間でウワサしてたところだぞ。良くあのギトーを追い出してくれた。」

感謝するぞ。」

何かしてたのですかね。ギトーさん。

凄く嫌われっぷりですよ。

前世でもココまでは嫌われて無かったと思いますが。

「タロー・ヤマダと言います。マルトーさんで宜しかったですか？お世話になります。」

「いや、世話になったのはオレ達だ。

あのギトーにはオレ達は散々な目に遭わせられたからな。

魔法も使えないオレ達に、ヤタラと風がどうのとか、標的にして怪我させられたりとか。

惨い事ばかりしやがって。

オスマン校長に訴えても聴いてくれなくて困ってたんだ。

だがアンタがヤツを潰してくれたおかげで、オレ達の被害は終わった。

何でも徹底的に潰してくれたそうだな。

オレ達の盾として戦ってくれて本当に感謝する。

なあ皆。」

「「「そうですぞ。タロー・ヤマダ殿はオレ達の盾です。」」」

「お前の事はオレ達の盾と呼ぶ事にしよう。
オレは嬉しくてお前にキスしたくなったぞ。」

「いや・・・自分はノーマルなのでヤローからキスされるのはイヤです。」

遠慮します。

それよりも賄いを頂けませんか？

昼からも授業が入りますので腹ペコでは働けません。」

「おお、忘れてた。今すぐ準備してやる。少しだけ待て。」

マルトーは賄いとは思えぬスープとサラダ、そして一番いい部分のパンを出してくれた。

腹も膨れたので、オレはマルトーに礼を言い、厨房を辞すると広場の片隅で休む事にした。

「フー、疲れた。」

相変わらず飛ばしてくれますよ。マルトーさんは・・・
ん・・・いい素材となる木が落ちてますな。

ちとオモチャでも作りますか・・・。」

オレはそれを拾うと、職員室の自分の机に帰り、そこで木材を加工する事にした。

「んっど・・・。テファはさすがにヤバいので・・・。

見られても大丈夫なのに加工すっか。

ンジャ・・・。。。。。」

しばらくオラは木材の加工とクリエイトに熱中してた。

思い浮かべたのは、現世で話題となってた某アニメ。

ホラ、友達が居ないとか言う癖にリア充してたアレのキャラの妹ですよ。

あの子ならこの世界に居ても不思議では無いキャラです。フフフフフフフフ・・。

我ながら快心の傑作です。

見事にK.O.鳩ちゃんとンコシスターの絡みを作れました。

あの二人の絡みはホンマに和ませて貰いましたからね。

最終回だったのが残念。

有中部で動画見れますから、二期も見れるとは思いますが。

ン?????

何で皆様、コチラをガン見してるのですか?????

「タ・タロウ先生、それってタロウ先生が作られたのですか？」

「ええ、私の趣味の一環ですよ。キリッ♪」

「素晴らしい出来ですね。売り出しても絶対に売れると思いますが・・。」

誰でしたかしら？

原作にも居なかったキャラの先生です。

彼の背後からは私と同じヲタの空気が漂っておりますが・・。

「すみません。まだ同僚の方の名前を存じ上げていませんので。宜しければお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「おお、名乗るのを忘れてました。

私は風系統の魔法教師助手をしています、アキバ・オオスと申します。

」

何ですか？モロにヲタの聖地を使ったっぽい名前は。

しかしこの世界でアキバなんて・・・

何て素晴らしいでしょ。

そう言えば風の助手と言いましたね・・・聞いておきましょう。

「風の助手をされているのですか？先程ギトー先生は退職されたが。」

「モチロン聞いています。で、次の風教師はタロウ・ヤマダ殿と決定しました。

貴方が私の上司となります。ヨロシクお願いします。」

彼が助手ですか・・・

でしたら仲良くしておくべきですね。

では、コレは彼に差し上げますか。

どうせ片手間に作り上げた品ですし・・・

「分かりました。アキバ・オオス先生。宜しくお願いします。

私がタロウ・ヤマダです。

で、どうでしょう。お近づきの印にこの人形をプレゼントしたいと思いますが。

迷惑でしょうか？」

すると・・・

「ほ、本当にいいのですか？いや、素晴らしい出来ですし、見るだけでも幸せだと

思ってたのです。まさか頂けるとは・・・

ああ、夢の様です。」

チーン♪

この方もヲタク確定です。

同僚となる方ですし、色々と楽しく仕込みますか・・・。

その後アキバ君に色々とヲタ情報を話したり、フィギアアの事を教えたりして楽しい一時でした。

やはりこの世界も「染める」べきですね。

リア充となろうが、ヲタは不滅です。

またフィギアショップ作るとおおお。

あ、始業時間だ。

次の授業はシュヴァールズ先生だな・・・。

職員室にて・・・（後書き）

タロウはリア充になってもヲタは止めません。
また店を作ろうかな・・・。
ふう、いい仕事でした。

ルイズと彼（前書き）

彼が登場です。

ルイズと彼

タロウです。

いやアキバ先生ってマヂでヲタの素質が在った方でしたよ。色々と情報を聞き込むと、幼女が大好きだとか。

もちろん実際に手を出すとかは妄想もしていません。

ただ眺めて愛でるのだけで満足してたそうで。

この学院は幼女に近い生徒も多いので、中々良い環境だとか・・・アキバさん・・・。

マヂで手は出してはダメですよ。

この世界の法律がどうかは知りませんが、犯罪には変わりませんからね・・・。

さて授業の見学でもするべ・・・と考えてたら、背後から・・・。

「タロウ・ヤマダ先生。」

・・・この鈴宮ボイスは・・・桃髪爆発ツンデレ娘か・・・。

「ン？どうしました。ルイズ嬢。」

「午後の授業は使い魔のお披露目を兼ねているのです。で、あのおお・・・。」

「分かりました。皆まで言わなくても結構です。では校長室に行きましょう。」

あそこで召還する約束でしたからね。」

さて・・・彼を呼び出すか・・・。

この世界でもルイズの虚無は発露させないつもりです。

お子様が戦争の道具にされるのは悲劇ですもんな。

悪い目は潰しておくべきです。

ゼロ様をお願いして彼女の虚無体質を剥奪しておかないと・・・。

オラはルイズ嬢を引き連れ、校長室に到着♪

一応ノックします。

「オスマン校長、タロウ・ヤマダです。

ルイズ嬢の件でお伺いしました。」

「タロウ殿か？入りたまえ。」

許可出たので入ります。

そう言えばマルトーのオヤヂの訴えを無視してたっつーてたな。
少しお灸を吸えておくか・・・。

中にはマチルダさんとオスマンが居ます。

「ルイズ嬢が昼の授業で使い魔お披露目があるとかで、
使い魔を献上する約束を果しに来ました。」

「おお、そうかね。

ミス・ヴァリエール。良かったね。」

「ハイ。でもどんな使い魔が来るのでしょ。」

「チョイお待ちを。

あまり時間ありませんのでチャッチャッと片付けてしまいますね。

」

オラは頭の中で「彼」をイメージし、彼を異界に呼び出す事にした。

「P e s o 2、出でよおお。」

激しい光が出現。

ガン見してたオスマン達は、

「目がああああ。」と光に目を射られたらしいっす。

お約束ですな♪

やがて光が収まると・・・

そこには「彼」が居ました。

「クエツ？」

「彼がルイズ嬢の使い魔となって頂くペソペソです。

P e s o 2とでも呼んでください。

少しお待ちくださいね。彼に納得してもらいますので。」

オラは念話で彼に話しかけ、ルイズの使い魔として遊んでヤレと頼んだ。

ペソペソはメシとフロはあるべな？と聞いて来たので冷蔵庫の部屋も設置したる。。

と、約束したら彼は納得してくれた。

「・・・終わりました。」

彼の名はペソペソ。異界に居る温泉ペンギンです。ルイズ嬢、彼の居室は私がプレゼントしますので夜にお邪魔しますよ。

ああ、彼はお風呂が大好きですので、毎日の入浴は必ず一緒にお願いします。

男性つつーても彼なら女性のフロでも大丈夫でしょ？」

ルイズはフリーズしてたが、やがて・・・。

「コ、コ・コ・コ・コ・・・」

「コケコッコーー♪」

思わず突っ込んでしまいました。

「違うわよおお。私はニワトリでは無い。

コレが私の使い魔になるの？

何て・・・カワイイ♪」

やはり双月の世界でも女性のストライクゾーンは変わりませんね。

お子様や女性はペンギンが大好きです。

普通のペンギンなら過酷な人間環境で生きるのは大変ですが、

あの桂木亭の夢の島で、生き抜けるタフな彼なら、

このハルケギニアで立派に戦ってくれるでしょう。

モチロン愛玩ペットとしてですよ。

「彼は魚介類が好物ですので、食事の時は一緒に与えてください。さっ、ペソペソ。お前のご主人様、ルイズ嬢に挨拶しなさい。」

彼はクエツと言うとペタペタとルイズに近づき、右手？を差し出す。

「ホラ、ルイズ嬢、彼が挨拶してますよ。握手して自己紹介してね」
♪

「クエツクエツ♪」

「ペソペソ、

私が貴方のご主人様となるルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。

ルイズでいいわ。

ヨロシクね。ペソペソ。」

「クエツクエツ♪」

ウム・・・おおむね好意的に交流出来そうですね。

やはり彼女には彼を使い魔とするよりは、こう言う動物を使い魔にするのが一番ですよ。

さて、使い魔の件はコレでヨシとして・・・。

オシオキして置きましょう。ヤツに・・・。

「ルイズ嬢、彼を連れて教室に行きなさい。

歩くのが遅く思う時は抱いて歩いてもOKです。」

「だ・だ・だ・だ・・・抱いてもいいんですか？
ンナ可愛い生き物を。」

「貴女の使い魔ですよ。大切に扱ってくださいね。」

「もちろんです。タロー先生、ありがとうございました♪」

ルイズの私に対する好感度は少しは上がったみたいです。ねま、いいでしょ。

さて、彼女が退室したら・・・。

「オールド・オスマン殿。

自分は本日、厨房で賄いを頂いたのですよね。

そこで・・・楽しい話を伺いました。」

「な・・・ナニもしてないぞ。ワシは。」

「ええ、ナニもしてないですね。本当に。

貴方はこの学院のトップですよね？」

「そうじゃが・・・。」

「それなのに厨房の調理人がギトーから苛められていると言う陳情を無視してたとか・・・。

彼等はギトー退職を聞き大喜びで泣いてましたよ。

どうしてトップである貴方は彼等の陳情をシカトしてたのですか？

ロングビルさん、ヤツを取り押さえてください。」

「フフフ♪タロー様、了解です。」

オスマンが脱走する前に彼女にヤツを捕縛して貰いました。

「や、止めてくれえええ。」

「彼等の苦しみを味わって貰いますか・・・。

魔法無効、そしてヤツの魂を地獄の煉獄に一日封印。」

オスマンはピクリともしなくなり、動かなくなりました。

「タロー様、彼は・・・。」

「ヤツの魂を一日、地獄の煉獄に封印しときました。
平民の皆様の苦しみの一部にしかありませんが、彼も懲りると思います。」

「ま、それは良い事を。
では彼の管理は私がしておきます。
明日まで放置しといて良いのですよね。」

「ええ、肉体は生きてますので。ま、多少垂れ流したら掃除だけお願いします。」

「お任せください♪」

オスマンは翌日、現世に戻るまで地獄のオニに叩き潰され煮られ焼かれて・・・。
地獄ツアーを楽しんで来たらしい。

数日ガクブルが止まらなくなり、オラの顔見たら逃げる様になりました。

くけけけけ。

少しは懲りただろ・・・。

ルイズと彼（後書き）

彼とルイズの生活に幸多からぬ事を。

オスマンは不憫ですね。

宜しければご要望などを入れて頂くと助かります。

私はただの・・・トライアングルですから（前書き）

の、シュヴァールズ先生の巻です。

私はただの・・・トライアングルですから

タロウです。

オスマンの管理をマチルダさんに頼み、オラはシュヴールズ先生の授業見学に来ました。

オヤオヤ、ルイズ嬢の周囲が賑やかですね。

早速ペソペソと戯れて楽しんでるのでしょうか。
ま、楽しく生きてください♪

「皆さん、春の使い魔召還は大成功の様ですわね。
このシュヴールズ、
こうやって春の新学期に様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみ
なのですよ。」

ルイズはニコニコしてた。

「まあ、ミス・ヴァリエール。とても愛らしい使い魔を召還したの
ですね。

それは・・・??」

「私の使い魔、ペソペソです。異界の温泉ペンギンと言います。
オフロが大好きだと言う事です。」

「ルイズ、その子、お風呂に入るの？私も一緒に入るからさ・・・。」

「イ・ヤ・♪私のペソペソに触らないで。」

「ゼロのルイズ、そこ等を歩いてた動物を浚って来たのだろうか？」

「失礼ね。ちゃんと召還したわよ。」

「ウソつけ。ゼロのルイズの癖して。」

「ミセス・シュヴルーズ。侮辱されました。かぜっぴきのマリコルヌが私と

ペソペソを侮辱しました。」

「かぜっぴきだと？オレは風上のマリコルヌだ。風邪なんかひいてないぞ。」

シュヴルーズ先生は手に持った杖でマリコルヌに向けて振ると・・・彼は糸の切れた人形みたいに椅子にへたりこんだ。

「あまりお友達を罵倒するといけませんわよ♪皆様♪」

シュヴルーズ先生は氷点下以下の冷たい顔でマリコルヌを睨みつけてたのです。

マリコルヌはカクカクと首を振り、彼女に従うしかありません。

さて、いよいよ楽しいお勉強の始まりです。

「私の二つ名は「赤土」。赤土のシュヴルーズです。」

そう言えばタロウ先生は全系統がお得意だそうですね。

先程のゴーレムは見ましたが、本当に見事なゴーレムでした。私にはとても作れそうにありませんわ。」

いきなり話を振りよったぞ。この○バハン。

「ご紹介が遅れて申し訳ありませんでした。

私は異国のメイジ、タロウ・ヤマダと申します。

ギトー先生の退職で後釜に入る事になりましたが、一応・・・。

土も使えます。でもこの国の魔法はあまり拝見していませんので、シュヴールズ先生の見本を見せて頂けませんか？

自分がこの国の魔法だとどのレベルにあるかは、分りませんので。見本の後に私も真似して見ます。」

「ま、素晴らしいお話ですわね。

では、この赤土のシュヴールズ、

お手本になるかは分りませんが全力を尽くさせて頂きます。」

シュヴールズ先生はギトーとは違い教え方も丁寧ですね。

この方は絶対に残って貰うべきです。ハイ。

彼女が杖を振ると、教壇に乗ってた石ころが光輝きピカピカの金属に変わったのです。

「せ、先生。それはゴールドですか？」

褐色の肌のナイスバディの生徒、恐らくキュルケでしょう。

彼女がシュヴールズに質問しました。

「違います。ただの真鍮しんちゆうです。ゴールドを錬金出きるのは、

「スクウェア」クラスのメイジだけです。

私はただの・・・。」

「「トライアングル」ですから・・・。」

やはりこの世界でも彼女のセリフは変わりませんね。

さて・・・。

自分も全力を尽くして見ますか・・・。

彼女も自分の能力を全開で見せてくれましたからね。

礼儀として自分も手抜きナシで頑張って見ます。

「シュヴァールズ先生、見事な真鍮ですね。

では自分も真似して頑張って見ます。」

そう言う彼女から手ごろな石を譲ってもらい、教壇の上に置く。

彼女の練成した真鍮モドキは別の場に移しましたよ。エエ。

「ではやって見ますね。もし危険と感じたら即刻止めますが、大丈夫と判断できたら、最後まで練金して見ます。」

「楽しみですわね。タロウ先生・・・。」

フム・・・。全力を出すと騒がれる危険もあるが、あまり手抜きしてもね・・・。

んじゃ銀辺りで止めて置きましょう。

出でよ、シルバー・・・♪

すると・・・、教壇の上の石が光り出し注視する事も出来なくなつたのです。

しばらくすると、光は収まり、教壇の上にはキラキラと輝く・・・。

「こ、これは・・・銀ですか？」

「ハイ。銀をイメージしましたが。調べて頂いて結構ですよ。」

「分りました。ディクットマジックで調べて見ますね。少しだけお待ちください……。」

そう言うとき彼女は杖を振るいオラの練成した銀の石を調べ始めました。

すると……。

「す、素晴らしいですわ。」

先程までの石を完璧な銀に練金してしまうとは……。タロウ先生の土魔法の実力は私よりも遥かに上です。

もしかしたらスクウエアかも知れません。

素晴らしい練成でしたわ。」

手抜きしたのだけど、この程度なら大丈夫でしょ。

でもスクウエアか……。

前世でも到達したけど、あまり恩恵は感じなかったのよね。

それよりも、やはり土の技術だけは磨き架けて、早く店を持ちたいですよ。

テファもこの地に呼び寄せてあげたいしね。

「そうですか……。」

私の世界の魔法でもこの世界に通じるのですね。

色々魔法の方法も技術も違いますので、参考になるか心配してたのですが。」

「ご謙遜を……。」

ココまで見事な銀を練金出きるメイジは国中を探しても中々見つかりませんわよ。

タロウ先生、お時間の取れる時で結構ですので、ゴーレムとか錬金についてご教授してください。」

それからオラは授業の合間に自分の趣味に没頭し、
彼女に怒られたのは言うまでもありません。

ん．．．。

そう言えばこの授業でルイズが教室爆破事件を起こすハズだったな．
．。

ま、いいか。

迷惑なイベントだし．．．。

私はただの・・・トライアングルですから（後書き）

穏やかな授業でした。

次回からはアレなイベントが始まります。

良い子の皆は飛ばして見ないでね。

ウフフな夜♪(前書き)

さて、皆様、お待ちかねのウフフタイムです。

ウフフな夜♪

タロウです。

シュヴァールズ先生の授業の後、自分の住処を作るためオスマン氏から指示された、

学院外の空き地に居ます。

ココに自分の新しい住居を錬金して作るのですよ。

やはり貴賓室では落ち着きません。

さて、始めますか・・・。

まずは土を掘り下げ地下室の土台から作ります。

いえね、前世で烈風オカンに家を破壊された時から考えてたのですよ。

大切なモノは地下に置くべきだったのでは・・・と。

数メートル掘り下げ、周囲をガッチリと錬金で固めます。

ええ、核攻撃でも生き残れるレベルにしますよ。

もうあの悲劇は味わいたくありませんので。

そして柱をガッチリと立て、周囲を土壁で固めてから錬金。

コレなら台風や雪崩でも耐えられると思います。

魔法って魔力の多い人間には本当に便利です。

こりゃハルケギニアで化学が発達しなかったのもムリではありませんかわ。

今回の人生は成り行きに任せると決めたので、魔法が便利なら頼る。慕う人が居たら取り込む。

抱いてと言われたら・・・。

ゲフンゲフンな関係もOKとしますよ。エエ。

下手に遠慮して関係を壊すなら、遠慮せずに行動し、関係壊す方が千倍はマシ。

ブツブツと独り言を言いながら、自宅の錬金を続けてたら・・・。

アレまあ。

完成してましたよ。

規模は鉄筋三階立てレベル。

地下は二階あります。

周囲は塀で囲い、後でアクア様をお呼び出きる池も・・・。

って・・・もう居たのですね。

アクア様・・・。

（タロウよ、良くぞ池を作ってくれたな。

中々居心地も良さそうだ。

我はココをしばらく宿とするぞ。

ラグドリアン湖には分身を置いてある。）

「はあ、お呼びしようと思ってたら来られたのですね。

アクア様、狭い池ですがお許しください。」

（狭くとも楽しい我が家となろうぞ。タロウよ。）

アクア様も引っ越された事ですし、自分も少ない手荷物を持ち込みますか・・・。

「シエスタさん、自宅が出来たので引越し致しますね。お世話になりました。」

「寂しくなりますわ。タロウ様・・・。」

寂しいって・・・。まだ一日居ただけですよ。この部屋。

手荷物も少ない事ですし、チャッチャッと移動して、フロでも入って屁こいて寝ます。

そしたらシエスタさんが、お荷物を自宅まで運びますとか言うので、甘えてしまいましたら、門のトコでマチルダさんが待ち構えてたのですよ。

「ロングビルさん、こんばんわ。やっと自宅が出来ました。」

「タロウ様、僕の私シモベを置いて出て行くななんてあんまりですわ・・・。」

僕シモベって・・・。

タイタイ、昨夜、アクア様に言ったのはマヂでしたか??

「私の窮地を救って頂いたタロウ様は私の永劫のご主人様です。もう秘書は辞職しましたので私はフリー。」

さあ、私のすべてを貰ってください。」

ロングビルさん、いやマチルダさんがそう話を始めたら、シエスタさん・・・。

手荷物をポトリと静かに置き、学院にダダダダと駆けて行かれたのです。

どうしたのでかね？

自宅に入り、手荷物を簡単に片付けフロの準備をしていると・・・。

コンコン・・・。

ドアを叩く音がします。

マチルダさんは食事の支度してくれてますので・・・。
誰ですかね・・・。

外を見るとシエスタさんが大きなカバンとミシンを引きずって来たのですよ。

ゼーハーゼーハーと凄い荒い息してますが・・・。
体力ありますね・・・って・・・違います。

何ですか？この荷物は・・・。

「シエスタさん、こんばんわなのですが・・・。
どうしたのですか？この荷物は。」

「タロウ様がロングビルさんを雇用なさると聞いて、私も雇用して頂こうと、
学院のメイドを辞職して参りました。
給与はいくらでも結構です。

タロウ様、私もメイドとして雇用してください。」

・・・フリーズしてしまいました・・・。
まだフラグ立てる程の事はしてなかった・・・ハズですよ？

シエスタさん。

そりゃマチルダさんとはゲフンゲフンな関係持ちましたから、もう他人とは言えません。

ですがシエスタさんには指一本、手すら握ってませんぜ。

自分は・・・

そしたらさ・・・。

背後から冷たい空気が・・・漂っているのですよ。

ぎ・ぎ・ぎ・ぎ・ぎ・と擬音の聞こえるみたいな感じで後ろを振り向くと・・・

マチルダさんが冷たい目で私達を見つめてるのです。

怒る気持ちは分りますが、まずは言い訳だけでも・・・

「タロウ様、お盛んな事ですな。

私と言うモノがありながら、メイドさんまで頂かれたのですか・・・」

「ご、誤解ですよ。マチルダさん。

自分は何もしていません。本当です。ね？シエスタさん。」

「ええ、まだ・・・ナニもしてくれないのですよ。

ひどいと思いませんか？ロングビルさん。

私は何時でもバッチコイなのに、全然無視してるのです。

女として悲しいですわ・・・」

ヨヨヨヨヨと泣き叫ぶシエスタさんですが、自分が泣きたいですよ。

で、外でビーカービーキャー騒いでも話が出来ません。

まずは二人とも家に入って貰い、話し合いとしましょうか。

「シエスタさん、ロング・・・いや、マチルダさん。

まずは落ち着いて頂き感謝致します。

さて、今宵の一件ですが、シエスタさんとは本当につ、ナニもしていません。

これは神にかけても構いません。

マチルダさんに関しては・・・・・・・・です。ハイ。」

「タロウ様、私の事を認めて頂きありがとうございました。で、そのシエスタさんでしたか？

どうしてこんなに強引にこの方の所に来られたのですか？

私は先程お話した通り、色んな事でタロウ様に窮地を救って頂きました。

水の精霊様も承認して頂いております。」

「み、水の精霊様ですか？？あのラグドリアン湖の・・・」

（呼んだか？タロウの僕のマチルダよ。

そしてそこに居るのは・・・。

我の知る古き時代のタロウの僕の水の流れに似ている。

単なるモノよ。名を名乗れ。）

「み、水の精霊様ですか？

私はシエスタと言います。タロウ様のメイドとして押しかけて参りました。」

（フム・・・単なるモノはシエスタと名乗るか・・・。

遙か昔のタロウの僕の一人にもそう名乗る単なるモノが居たと我は記憶してる。）

「本当ですか？ 水の精霊様。

私はタロウ様にお会いした時に、
すべてを投げ出してでもこの方と離れてはいけない。

そして今宵、タロウ様が学院の貴賓室を引き払い、この家に越され
ると聞いた時、

すべてを無くしても構わない。

その気持ちでタロウ様の家に押しかけメイドをしたのです。

もう魂が引き合わせたと思った方はタロウ様だけなのです。」

（そうか……。シエスタと名乗る単なるモノよ。

オヌシの水はやはり古き時代のタロウの僕と同じと認める。

タロウよ。私の言う事は間違っておるか？）

「……。精霊様がそこまで言われるなら、もう隠す云われはありませんね。

マチルダさんには話しましたが、シエスタさん。

途方も無い話をしますが、発狂したとか思わないでください。」

「大丈夫です。私はタロウ様の話される事なら例え、明日、ハルケ
ギニア全土が

双月まで浮き上がると言われても信じます。」

「……。シエスタさん、風石が暴走すると冗談抜きで浮き上がるので
すがね。

この大陸は……。

ま、また何とかなるでしょ。

前世でも出来た事ですわ。ハイ。

それから、自分の昔話を始めました。

ルイズに召還されたのはコレで二度目。

魔法に関しては完璧にチート。

今なら烈風のカリンでも潰せる实力がある。

そしてすべての精霊ともその時代から通じてる。

この世界に住む人間なら誰でも知ってるブリミルの最後の事も・・・
そして多くの妻～ズの事も・・・。

話が終わりしばらく沈黙が続いた。

先端を切ったのはマチルダ。

「そうでしたか・・・。

ですがそれなら、すべてに合点が行きます。

私は貴方に抱かれた時、もう何も要らない。

そう思いました。

ただ、アルビオンの妹の事だけは心配でしたが。」

「私も・・・。

タロウ様の言われる事はすべて真実と思います。

そうで無ければ、生娘の私が異国の男性にいきなり惚れる訳がありません。

恐らく魂が呼んだのだと思います。

タロウ様、もしお金が苦しい時は、私を女衞に叩き売っても構いません。

どうか私をココに置いてください。」

・・・シエスタさん、女衞に叩き売るなんて凄い事、出きる訳無いっしょ。

それからアクア様も交え、今後の事を色々と話し合ったのです。

その後・・・ゲフンゲフン・・・。

二日続けて徹夜に近いのにアクア様、私の健康だけは治してくれる

のですね。

寝てないのに元気な自分って、悲しいです。

シクシク・・・。

ウフフな夜♪(後書き)

いよいよ妻~ズの結束が始まります。

食われたのか食ったのかは藪の中の事にしますね。

ルイズと彼 2 (前書き)

ルイズと彼のお話です。

ルイズと彼 2

私の名はルイズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
誇り高きヴァリエール家の惨女よ・・・。

チョッ、そのアホ作者。
アンタバカ？

字、間違えてるわよ。
脳が沸いているんじゃない？

私は三女なの・・・。

もういいわ。

昨日の召還の儀式では散々な事だったけど、私が召還した異国のメ
イジ。

タロウ・ヤマダって人、思ったよりいい人みたいね。

確かに魔法の技術は凄い。

ひよっとするとお母様ともタメ張るかも知れない。

だけど私には関係無いわ。

だって・・・私は・・・ゼロのルイズ・・・。

魔法が成功したのは昨日の召還の儀式のみ。

契約は出来なかったけどね。

でもタロウ先生が私との約束をしっかりと守ってくれた。
使い魔としての存在の彼を私に授けてくれたのだ。
彼の名はペソペソ。

お風呂が大好きな温泉ペンギンと言う珍しいペンギン。
ペタペタと歩く姿は今回の召還で出現した使い魔の中でも一番の可愛さと自慢出きる。

あのキュルケも羨ましそうに見てたもんネ♪

久しぶりに快感を味わったわ。

でも彼って本当にキュート。

確かにブレスを吐くとか、空を飛ぶとかは出来ないわ。
でもね。

凄く癒してくれるのよ。

存在が神よりも貴重なのって彼くらいよ。きっと・・・。

ちい姉さまが動物を可愛がる気持ちが始めて理解できたわ。

お風呂に入るとパタパタと元気良く泳ぐし、皆は触りたがる。

体をブルブルと震わせてお湯を飛ばすトコなんか皆で大笑いしたわ。

でも、彼、凄いのよ。

私が散らかしてたパン〇とか下着をキッチンと籠に入れるし、
箒を使って掃除はする。

それに私の言葉も理解出来てるみたい。

もちろん私は彼の言葉が分らないけどね。

でもそのウチに理解出きると思うわ。

だって私の言葉に色々楽しく反応してくれるモン。

タロウ先生に後で聞いたら、人間の子供位の知恵があるんだって・・・。

掃除出きるペンギンなんて彼くらいよ。

本当にアタリの使い魔だったわ。

ふう・・・それにしてもタロウ先生、遅いわね。
もしかして忘れたの??

彼の寢床の事。

仕方ないわ。

今日は私のベッドで寝て貰いましょう♪

モフモフしてカワイイ♪

おやすみなさい・・・。

クエツクエツ（オレの冷蔵庫は？？）

ルイズと彼 2（後書き）

彼とルイズのお話2でした。
冷蔵庫設置するの忘れてたので・・・。

朝（前書き）

朝です。

朝

タロウです。

夜が明け、朝となりました。

新居の新しい家にはガッチリとしたベッドも作って置いてあります。ですが、このガッチリした広いベッドは凄く狭く感じます。

両サイドから抱きしめられて寝てる訳ですからね。

彼女達に。

昨夜からゲフンゲフンな関係となってもたシエスタも私の隣に寝てます。

ファ・・・アア・・・。

完璧に寝不足ですよ。

どうしましょ・・・。

（タロウよ、お前の体調維持は我に任せろ。
例え病に倒れても確実に治癒して見せる。）

アクア様は、そう言われると自分の身体にダイブして通過されてしまいました。

そしたら身体の不純物や疲労、その他がすべて取り除かれてしまうのです。

精霊様が居たら、医者なんて絶対に要りませんね。

医者頃ですよ。ハイ。

何故か彼女達もダイブされたらしく、彼女達もスッキリした顔で目覚めています。

「二人ともオハヨ・・・。

精霊様が自分達の身体を通過してくれたので、爽やかになってると思うんですが。」

「タロウ様、おはようございます。
そうなんですか？　そう言えば私の身体も色々とスッキリしてます。
精霊様のおかげなのですわね・・・。」

「ありがたい事です。水の精霊様・・・。」

体調が万全になった事を確認したオレ達は、ベッドを出ると、
色々と散らかってる部屋を片付け、朝ごはんの準備にかかります。
いえ、シエスタさんが昨夜退職する時に、厨房から色々と頂いて来
たみたいで、
すぐにご飯の準備は出来てしまいました。

「タロウ様、この家の管理は私がキチンとしますので、お仕事は
頑張ってください。」

「タロウ様、学院での雑務は私が見ますので、ご安心を。」

本当は一日でも早くティファニア達を呼んであげたいのですが、
この土地は借り物。

まだ自宅以外の用途には使えません。

彼女達がこの地に来たら・・・。

お店を開きたいですね。

さて・・・支度して学院に行きますか。

そう言えば、何か忘れてた気が・・・。

「あゝ~~~~~!!」

思わず大きな声出してしまいましたが、「彼」の寢床を設置するの
忘れてました。

家作りとシエスタさんの騒ぎで完璧に忘れてたのです。

大丈夫だとは思いますが、彼が健康を害するのは良く無いのです。早速女子寮に出かけましょう。

「マチルダさん、少し急用が出来ましたので、ルイズ嬢の部屋に出かけて来ます。

終わり次第職員室に向いますので。」

「分かりました。私はタロウ様の授業の準備などを済ませておきます。」

やはり彼女は素晴らしいですね。

オスマンもそろそろ現世に帰る頃でしょうが、机の上には辞職届けが置いてあるそうで。

さぞやビククするでしょ。

まあしばらくは一人で頑張ってください。

さて、女子寮に参りました。

ですが、さすがにいきなり入るのは気が引けるのです。誰か居ないかな……。

「あら？タロウ・ヤマダ先生ではありませんか？」

「この声は……。モンモランシー嬢ですか？」

「ハイ、モンモランシーです。先日はありがとうございました。おかげで悩みの一つが消えて、快適な生活を送れています。」

育った2つの胸をブルンと震わせ彼女は嬉しそうに言います。
良かったですね♪

で、彼女の案内でルイズの部屋を訪ねる事にしたのです。ついでに一緒に居て貰います。

さすがに女子寮に男性が入り、二人つきりとなるのは色々と問題です。

「ルイズ、タロウ先生が貴女に用があるそうですよ。」

「モンモン？タロウ先生が来たの？すぐ開けるわ。」

彼女はペソペソを抱いて寝たせいか、肌がツヤツヤですね。

「ルイズ嬢、彼の寝床を準備する約束を果しに来ました。

モンモランシー嬢は貴女と二人きりになるのを避けるために居て貰います。

宜しいですよね？」

「仕方ないわね。いいわよ。で、彼の寝床ってどうすんの？」

「少しお待ちください・・・。」

自分は「彼」が良く使ってた冷凍庫を頭にしっかりとイメージし、クリエイトを始めました。

精霊様のおかげで体調は万全。

魔力も満タンです。

数分後、彼の寝床はルイズの部屋にデンと鎮座していました。

「ね、コレって・・・ナニ??？」

「彼の部屋ですよ。ああ、上のドアには冷たいモノを作る場となっていますので、

氷とか欲しい場合は自由に使えます。
定期的に魔力の充填に来ますけど宜しいですか？」

電力の無いハルケギニアで彼の寝床を稼働させるために魔力を機械部分に貯めて、

寝床を冷やす構造にしたのです。

下手に電力など持ち込んでも意味無いですから。

一回の充填で一月は持ちます。ハイ。

「そ、そんないいモノなの・・・。

でもペソペソの嬉しそうな顔見てたら、分る気するわ。
上の部屋には氷が何時もあるのね。」

「その通りです。

氷を入れる器に水だけ足して貰えば何時でも使えます。」

「ルイズ、いいわね・・・。たまには氷を頂戴よ。」

「イヤ、コレは彼のモノなの。

何でモンモンにあげないといけないのよ。」

「まあまあ、仲良くしてください。コレは貴女の私物では無く、彼の家なんですからね。

な？ペソペソ??？」

「クエツクエツ♪」

「・・・もう・・・分ったわよ。あら、ペソペソ、早速家に入るの？」

ペソペソは早速自宅に入り、自分好みに設定しているみたいです。

暑かったのか、中からロックをかけてしまいました。

「彼も異界に来て疲れたのでしょ。

ルイズ嬢、彼はしばらく休ませてあげて下さい。

食事は与えてくださいよ。」

「分ってます。後で厨房から貰ってきますから。」

まあコレで彼の暮らしは大丈夫でしょう。

さて、職員室に行き、今日の授業の準備でもしますか・・・。

オラは道々色々と今後の設定を考えてた。

誰かが常に周囲に居る現状では、歩きながらでないと落ち着いて考えられないのら。

まず、何時までも学院で教師を続けるつもりは無い。

やはりヲタシヨップをこの世界に作るのが究極の目標。

前世みたいにロマリアがイチャモンをつけない限りは、穏やかに暮らしたいな。

だがその前に色々この世界に食い込んで自分の立場を明確にしておくべきだ。

何時までも異国のメイジでは、色々和不味い。

拗って、アルビオン戦までは、学院の教師を続けよう。

ウエールズは殺さない。

彼を殺すとあの姫が暴走を始め、やがては世界の崩壊にたどり着いてしまう。

それだけは絶対に避けるべきだ。

もつともルイズはアルビオンには行かせないけどね。

邪魔だ。はっきり言うと。

ネ申様のプレゼントでオラは現状で虚無も発動出きるのだ。

呪文もすべて思い出している。

最悪の事態の時以外は発動させないが、万一の保険にはなるだろう。
アホ姫がルイズに絡むイベントの時は、ムリにでも介入しルイズは
残って貰う。

ま、この程度、予定を考えておけば良いだろう。

アキバ先生は、教師辞職時の後任に仕込んでおかないとニャア♪

朝（後書き）

彼の寢床設置イベントでした。

魔力で稼働させる設定にしておきます。

そして今後の展開も独り言調で呟いておきます。
次回から新章に入ります。

ただ今授業c h u ♪ (前書き)

タロウの授業風景っス。

ただ今授業c h u♪

タロウです。

オスマン殿は現世に帰られたみたいですが、椅子に座ったままで垂れ流し。

しかも机の上にはロングビルさんの「辞職届け」。

内容はセクハラ爺さんの面倒はもう見れません。

タロウ・ヤマダ様に永久雇用されます。と、書いてあるのだ。

タロウに恐怖心を持ったオスマンが逆らえるハズも無く、自分で床の掃除をしたり、

書類の決裁をする事になった。

秘書の募集をしたが若い女性が好んでセクハラジジイの元に来るハズも無く。

しばらく彼は一人、書類の山と戦う事になるのら。

ルイズ嬢の部屋を辞したオラは職員室に来てますた。

マチルダが完璧に準備してくれてたので、後はアキバさんと打ち合わせする程度。

今日から風魔法教師、タロウ・ヤマダの出陣となるのです。

ま、長い事働くつもりはありませんがね。

さて・・・授業に入りますか・・・。

クラスは三年の某クラス。

原作にも出て来ないクラスですので、キャラと名前が一致しません。生徒の名はAとかBで表現します。

お許しを♪

「えっと、私がギトー先生の後任として風魔法の教師を勤める事になりました、

タロウ・ヤマダと言います。

得意な魔法は全系統です。」

「ミスタ・タロウ・ヤマダで宜しいでしょうか？
ボクは風魔法が得意のラインメイジです。

昨日は元教師のギトー先生と対決されて勝たれたそうですが、事実ですか？」

「ええ、事実です。
もっとも私は彼と戦うつもりは無く、模範演技だけのつもりでした
が。」

そう言う生徒達はザワザワと騒ぎ出したのだ。
まさかあのギトーが敗れるとは・・・とか、不意打ちで勝ったんだろ
う・・・とか・・・。

ふーん・・・。

やはり受け入れられるまでは色々ありそうですね・・・。
仕方ない。

オラは偏在を編み出し、すべての生徒一人ひとりに対峙して説明に
充てる事にしたのだ。

全ての生徒、約四十人に偏在だ。

さすがに彼等もメイジ。

これがいかに凄い事なのか、ようやく理解出来たらしい。

一時間、個別に魔法を偏在が指導を続けたので彼等のオラに対する
評価は、

徹底的に改めて貰えた。

やがて休憩時間となり、偏在を消しクラスを辞すると、
彼等は自分に色々と質問して来たのです。

どうすれば偏在をあんなに大量に作れるのか？

とか、魔力は？とか・・・。

まあ機密もありますので、特訓の賜物とだけ答えておきます。

彼等が三年を始めとする全学年にウワサを流してくれたせいか、それからの授業では疑う生徒はほぼ皆無となりました。

やはり始めの一步は肝心ですな。

まさか生徒と決闘なんて出来ませんしね。

で、再びルイズのクラスです。

ようやくキャラと名前が分るクラスとなりました。

前回とは違い、最初からデブキモオタの外観は消したので、以前程、嫌われる事もなく、概ね好意的に感じられますね。

特に敵意が無いのは楽です。

まあ、たまにはバカな生徒も出ますが、今なら容易にあしらう事も可能です。

たまに不意打ちでカッタートルネードとかファイヤーボールをブツ放すアホもいますよ。

でも全部、叩き返しております。ハイ。

彼等も自分の魔法がいかに危険な存在なのか理解出来たみたいで、二度とバカしくなくなります。

やはり子供の躾けは大切ですね♪

アキバ先生は私の授業光景を教室の片隅で見学し、ノートに色々と書き溜めています。

参考になれば良いのですが。

彼には後任をお願いしないといけません。

恐らくアルビオン戦までには・・・。

授業が終わった時の事です。

薔薇男こと、ギーシュ君が自分の側に駆け寄って来たのです。

何でしょうね？

「ミスタ・タロウ・ヤマダ先生、お願いがあって来ました。」

「ギーシュ・君でしたよね？」

タロウ先生で良いですよ。どう言う質問でしょ。

スリーサイズは秘密ですが……。」

「えっ、それは残念……って違う。

誰が男性のスリーサイズを聞きたいモノ好きが居ますか……。」

「オヤオヤ、残念ですね。

では……。」

「お待ち下さい。タロウ先生。

先日対峙したゴーレムの事です。」

フム……あの○ジンガーZの事ですな……。

やはり漢^{オトコ}の浪漫はスパーロボット、そして武器ですよ。

「アレの事ですね。アレは私の「この世界」ではオリジナルで考えた、

マ○ンガーZと言います。本当は学院の建物位の大きさが基準なのですが、

決闘用に作ったため、人間サイズで作りました。

それがナニか？」

「あ、アレで手抜きだったのですか？

そして建物サイズとは……。」

「そのままの意味ですよ。」

アレが本当に戦闘体系となる場合は巨大ゴーレムとして、相手を粉砕してしまいます。

まあこの世界では無敵ゴーレムとなる自信はありますよ。」

「凄い・・・、強そう・・・カッコイイ・・・痺れます。」

「ギーシュ君、理解してくれましたか？」

「ええ、モチロンです。それに比較してボクのワルキューレの弱かった事。」

もっと鍛えるべきでした。

天狗になる前で良かったです。先生。」

「キミはまだ若いんだ。鍛えて、想像力を付け、魔力を強めれば・・・。

何時かは世界がキミを振り向くだろう。

努力と研磨ですよ。若者は。」

「分かりました。先生。努力して見ます。」

「ウンウン。素直な若者は好ましいですよ。」

「何時か時間の取れる時で結構です。個別指導をお願い出来ませんか？」

「個別ですか・・・。まあ考えておきます。」

私も新任なので色々とは今は忙しいのですよ。

もし鍛える気があるなら、放課後は自分の作れる最強のゴーレムを作り、

対峙させて戦わせて見たらどうです？

魔力切れには注意してくださいよ。倒れたら大変です。」

「・・・ありがたい貴重な話をありがとうございます。
では、今日から早速、ヴェストリの広場で訓練して見ます。」

「ウンウン。頑張ってください。自分も時間のある時は見学に行きますから。」

「楽しみに待っています。」

ギーシュはそう言うと、教壇から去り自分の机にと帰って行った。
彼も好きなキャラですから、時間見て色々コミュニケーション
を取り、

仲良くしたいですね。

この世界の彼もビンボなのでしょうか・・・。

だったらまたバイトで色々と活躍して貰いましょう。
教室を辞して、マチルダの待つ職員室へと帰ります。

最近の昼ごはんは彼女とシエスタと共に学院の広場で摂る事が多い
のです。

ああ、シエスタですが正式に雇用する事にしました。

お給料は学院メイドの数倍。

最も形式上の事ですけどね。

オスマンから預かった支度金の殆どを彼女に渡し、自由に使わせて
おります。

やりくりの得意な彼女に家の事は任せてたら食生活は完璧ですね。

昼餉を終え、しばらくボケつとしてたいので、彼女達には退散して
貰いました。

こうやって一人で居るのも大切な時間ですからね。

この世界に再び拉致されて、魔法のチートと言うプレゼントを貰っ

た自分ですが、

やはり地球世界は恋しいです。

親しい人は殆ど居ませんでしたけどね。

でも24H何時でも開いてるコンビニ。

ヲタの聖地、アキバ。

夏と冬に並んだコミケ会場。

溢れる位販売されてたヲタグッズやDVD。

嗚呼、この世界に無いモノがすべてありましたから・・・。

無ければ作ればいいジャンなのですが、一人の力は限界があります。

やはり同士を募るべきですな・・・。

アキバ先生は既に同士ですが、機密はまだ明かせません。

機密を知るのはマチルダとシエスタのみ。

彼女達が付いて来てくれるでしょうか・・・。

自分の趣味に・・・。

悩んでもヲタの道は開けません。

まずは一番信頼出きる彼女達にすべてを打ち明けるべきですな。

ルイズは、そろそろ何とかしておかないと、お姫様の暴走に巻き込

まれてしまいます。

アレが絡むとこの国は荒れてしまいますからね。

さて・・・。

今宵は彼女達に協力を依頼しますか。

聞いてくれるとは思いますが、拒否られたら・・・。

泣くしかないっす。

ただ今授業c h u♪(後書き)

ようやくヲタの道を切り開く決意をしたタロウです。
この世界にヲタグッズが溢れるか。
次回の更新をお待ちください。

告白（前書き）

マチルダさん達に告白します。

告白

タロウです。

自分はこの世界に来て最初の告白にドキがムネムネして・・・。

間違いました。

胸がドキドキです。

マチルダとシエスタに自分の胸のうちを告白し、付いて来てくれるか確かめるためです。

自分の我侭ですが、やはりヲタとは離れたくありません。異界と言えども自分の趣味は殺したくありません。

ビバ、ヲタクですよ。やはり。

現世ではそろそろヲタクも立派な産業の一つとして、認知されつつありますが、この世界では未知の分野。

ましてや彼女達は女性です。

ですが、彼女達なら受け入れてくれる。

そう信じています。

はあ・・・ヘタレなのでマヂな告白は死ぬより辛いっす。

一度は死にましたけどね。（笑い）

さて、シエスタがお茶の準備をしてくれたので、彼女にも着席を薦め、

大切な話があるので聞いて欲しいと頼みました。

彼女達も怪訝な顔してましたが、よほどの事と思ったのでしょう。

黙って席に着き、話を聞いてくれる様です。

「マチルダ、シエスタ。」

これから話す事は女性には受け入れられない話かも知れない。
もし自分が嫌いになるならそれでも構わない。
まずは話を聞いてくれないか？」

彼女達は紅茶をすすり、何でも話してくれと言います。
では、話すとしますか・・・。

「自分がこの世界は二度目だとは既に信じてくれますよね？」

「ええ、モチロンです。」

「存じ上げていますわ。」

「で、自分にはある趣味があります。
女性には不愉快に思う趣味かも知れません。
ですが、この趣味を無くしたら自分では無くなる位、自分には大切な趣味なのです。」

当然、この世界には無い趣味です。
受け入れてくれとは言いません。

ただ自分の人生の一つとして納得して欲しいのです。
聞いてくれますか？マチルダ、シエスタ。」

「モチロンです。私は貴方の僕です。」

「世界が敵に回っても私はご主人様のメイドです。」

「二人とも・・・。
ありがとう。」

さて、マチルダ。今から見せるモノを見ても驚かないで欲しい。」

そう言うとき自分が日本で作り上げたアノ・・・
ティファニアフュギアを彼女に見せたのです。

マチルダは驚き、その人形を繁々と見つめます。
そして・・・。

「コレってタロウ様を作ったのですか？」

「その通りです。
異界の母国、日本で作ったテファのフュギアと言う飾って愛でる人形です。」

彼女はそのフュギアをマヂマヂと見て、彼女の知るテファに瓜二つなのを確認してた。
そして・・・。

「タロウ様が異界から来たと言うのは真実なのでしょうね。
このテファの人形は本当に私の妹、ティファニアと全く同一です。
ここまで正確な人形はこの世界には絶対にありません。」

「理解してくれてありがとう。マチルダ。
そしてシエスタ、オレはある性癖の女性を妄想するのが大好きな人間です。」

異界に住んでた時は、自宅警備員と称して、自宅でパソコンや人形作りで遊んで暮らしてた、
ダメ人間でした。

この世界ではンナ事できませんけどね。」

「タロウ様は働き者ですわ。」

「ん、今はね。」

でも日本じゃホントにデブでキモヲタのマダオでした。

こっちに来なかったら死ぬまで引き籠もって生活してたと思います。

」

「そ、そんな勿体無い事を・・・」

この世界にタロウ様を呼んだ神に感謝しますわ。」

「ええ、私もそう思います。タロウ様、私達が付いています。

どんな性癖でも私達は受け入れます。

人形を作るモデルになれと言われるなら、どんな嫌らしい格好でも引き受けます。

どうか引き籠もらず、この世界で戦ってください。」

「私もですわ。タロウ様。

裸エプロンでも荒縄縛りでも何でも受け入れます。

私のすべてはタロウ様のモノです。

バッチコイですわ♪」

二人の告白にオレは・・・オレハ・・・。

感動

したどおおおおお・・・。

彼女達はやはり前世同様、オレを受け入れてくれた。

もう世界を敵に回そうが、この二人が居たら怖いものはナシ。

我が生涯に悔いナシ・・・。まだ死んでねーぞ・・・。

んで、今後の事も色々と話し合う事にした。
今から色んな事件がこの世界で起きる。

そして確実にオラも関わる事になる。

まだ確定では無いが、その過程で色んな妻～ズが増えてしまうが、それは許してくれ。

前世でもこの二人がオラの妻～ズの筆頭妻だったと告げると彼女達は大喜びしてくれた。

そして、どんだけ女が増えても私達を捨てないなら、いくらでもバツチコイ。

何だったら妻～ズの教育も引き受けたる・・・とか・・・。

やはりこの二人を引き入れたのは正解でしたね。

信じてくれる。

そして共に歩いてくれる。

こう言う奥様は本当にナニが起きても大切にすべきですよ。

DVして喜んでるアンタ。

奥様はモノではありません。

生涯を支えあう大切な番いですよ。

まあ本人の自由ですけどね。。

マチルダにはシエスタと孤児の件も相談しといた。

これから起きる事件の過程と同時進行で、この地の権利を国から貰ったる。

その時に改めて、この家の近くに孤児院を設立する。

そのの院長をマチルダに頼みたい。

そして孤児院と併設して、ヲタショップも作る。

彼等の日々の糧をそこで得れる様にしたい。

そう言う、単に生活を見るだけで無く、将来の事も考えて下さるとは・・・と、

彼女も大賛成です。

テファはコッチに来る時に耳を作り変えて普通の顔に出きるから安

心してネ、と告げておいた。

シエスタも黙って聞き逃してくれたし・・・。

色々話し込んでメシを作るの忘れたとシエスタが言うので、
久しぶりにクリエイト魔法で、デニー○のランチをクリエイト。

彼女達も大喜びで食ってくれました。

そしてその夜は更に激しくゲフンゲフンな夜になったのは言うまでもありません。

翌朝、アクア様のダイブで体調も完璧にして貰いましたけど・・・。

しかし良かったああ。

コレでヲタシヨップの道も少し前進したどおおお。

告白（後書き）

マチルダとシエスタとの密談の一日でした。

同土募集中♪（前書き）

いよいよタロウのフタ同土を募る暗躍が始まります。

同土募集中♪

タロウです。

マチルダとシエスタが受け入れてくれた事で、いよいよヲタシヨツプ、前進・・・。

とは行きません。エエ。

何せこの世界の連中の性癖と趣味が不明です。

いきなり変態シヨツプ出して誰も購入してくれなくて倒産なんて・・・。

悲惨です。

ですので、まずは健全なお店から出店するべきです。

彼女達もそれが安全と言いました。

ん、では、またあの手で・・・。

ま、お店はアルビオン戦が終わるまでは封印しときます。

地下室に趣味のフュギアは作り貯めてはおきますけどね。

作る時間あるの？って、そりゃ簡単ではありませんが、人間、成せばなる。です。

寝る時間を削ってでも彼女達を作る趣味は欠かせません。

最新のフュギアは神ネットで取り入れてPOして詳細をコピーしてあります。

ハルケギニアでも最先端のヲタは自分と断言出来ますよん。

さて・・・。

自分と同じ匂いを持つ人間ですが、中々分りませんっ。

フュギアを見せびらかす訳にも行きませんしね。

でもね・・・。

やはりこの世界は前世の輪廻ですよ。

だって・・・。

「帰られるのをお待ちしておりました。

我が主、^{あるじ}タロウ様……。」

ワルドが涙を貯めてオラの前に鎮座してたのです。

もうビックラですよ。

何でもオラがコッチに召還された頃、突然前世のワルドとか名乗る魂と

合体し、前世の少女趣味が脳内暴走。

そして学院にオラが居ると知るや、魔法衛視隊を退職。

身体一つでココに来たとか……。

アンタ、まだオラも仕事安定してないのに、辞めてどうすんの??

「大丈夫です。

自分は例え草の根をすすって生きてでも、タロウ様の負担はかけません。」

いや、思いつきり負担かけるじゃん。

オラ達がキャツキャツウフフな生活してて、ワルドさんに乞食同様の生活を

強いるなんてオニでは無い自分には出来ません。

ハア……、二人に相談しますか……。

もちろん彼女達は受け入れてくれます。

貴方の部下なら私達の同士と……。

ご飯位はキッチンと私が作って差し上げますとシエスタが言うと、ワルドは男泣き。

そして部屋はさすがに一緒はイヤなので、マチルダが庭の片隅に簡易な自宅をワルド専用

作ってあげたのです。

ワルドは奥方二人に……感謝しますって。

はあ、しかしワールドも帰ってたか・・・。

まあ彼には前世でも色々世話になったしね。

新作のフュギアをあげると、早速自宅の本尊にしますと、棚に飾って拝んでいました。

時代は変わってもヤツは変わってませんね。

さて、これで前世で自分を支えてくれた人はほぼ固めました。

後は実績作りです。

何と言いましても自分は未だに得体の知れぬ異国のメイジですから。人形作って楽しめる日々が来るまでの道のりはまだまだ先ですな。

んで、学院の教師を続けるべ・・・と、思い毎日を過ごしていました。ほしたらさ、やっぱり絡んで来るのです。

クーデレちゃんのタバサたんが・・・。

「貴方にお願ひがあるの・・・。」

生徒ではありますが、質問も無く名前も本名も（もちろん存じてますよ。）知らぬ、

異国の留学生。

タバサ・・・。

おそらくオカンを治して欲しいとか言うのでしょね。

そしたらさ。

やっぱしこの世界、自分の斜め上を走ってたみたいです。

だって・・・。

「貴方の僕にして欲しいの・・・。」

「ハッ??? ミス・タバサ。もう一度お願いします。」

「貴方との前世の関わりを思い出したの。」

お母様の事はいずれ何とかなる。

だけどモンモランシーやキュルケに貴方を取られる前に貴方の僕になりたいの。

正直、仇などは、もうどうでも良いの。

私の願いはただ一つ・・・。」

「ゴクリ・・・。」

「前世で最終回まで読めなかったヤライ小説の続きが読みたい。

そして貴方の脳内にある小説をすべてこの世界に出して欲しいの。

私にはこの貧相な身体しか無い。

こんな身体で良かったら代償に使っても構わない。」

いや・・・。タバサさん。私は変態ですがガチロリでは無いのです
が・・・。

「これから戦争が始まる事も思い出している。

私では足手まといとなるかも知れない。

だけど、貴方の背後を守る位の強さは持っている。

お願い、私を貴方の僕に加えて・・・。」

そう言えばこの方、前世でヤライにハマっていましたからね・・・。

しかしこの方、前回は妻〜ズには加えていませんぞ。

どうしてこうなった・・・。

「タロウ様、私達も貴方の小説に狂ってた人間です。
今、彼女の告白を聞きすべてを思い出しました。

あの脳に響く甘美な小説がこの世界に伝わっていないのは、おそらくハルケギニアが一度は滅びたせいかも知れません。」

何ですとおお。

一度滅びたのですか??

私のラ・フォンティーヌ領も・・・。

「この地は一度滅びたってホンマでつか？皆様・・・。」

「どうやら本当らしいです。

私も母の遺言を調べるためにトリステインのアカデミーで調査した事があります。

その中に、この大陸が一度浮き上がり人民すべてが壊滅。

その後新しい民がこの地に生まれついたなり・・・と言う文献が残されてました。」

アクア様、ホンマですか？

（ウム、タロウ亡き後、この地の精霊すべてが引き籠もってしまい、すべての精霊が力を放棄してしまったのだ。

その後、この地に住む単なるモノはすべて死に絶えた。

我はそう記憶している。）

あれま・・・。

オラの死去ですべての精霊様が引き籠もられたのですか・・・。
んじゃこの地を生き延びさせるにはオラは死ねない・・・っつー事
ですか？

（その通りだ。お前の存在はもはや単なるモノとは違うのだ。
さあ、我もあのお前が書いてた小説とか言う甘美な読み物を欲して
る。

早く書くのだ。タロウよ・・・。）

精霊様も読者だったのですね。

しかし、自分の死去がハルケギニアの滅亡に繋がってたとは・・・。
オラはどうしたらエエの？

〔死ななければ良いだけの事よ。〕

我や他の精霊も今度はタロウを逝かせぬと、気合を入れておる。

頑張ってこの地の神となるのだ。

タロウ、いやお父様よ・・・。）

「お父様って・・・。」

（もはやお前がこの地の神となるのは我等精霊の間では確定して
おる。

頑張って我等、すべての精霊を仕えさせて欲しい。

我が父となるタロウよ。）

「タロウ様、やはり貴方はタダモノでは無かったのですね。

まさかこの地の運命にも関わる存在だったとは・・・。」

「タロウ様、キュルケやモンモランシーに奪われる前に私を差し出
す。

私の主となって欲しい。」

もうメチャクチャです。

他の精霊様が乱入しなかったのは幸いでしたが、一度彼等にも挨拶

しておくべきですね。

それにしてもヤライか・・・。

ネタはいくらでもありますからね。

書くのは楽ですが、まずは地盤を固めてからね。

タバサさん、もう少しお待ちを。

同土募集中♪（後書き）

何かタロウの運命がハルケギニアの運命にも関わってたらしいです。
驚愕の運命を聞いたタロウはどうするのか・・・。
次回を待て。

キュルケ（前書き）

今回は微熱さんのターンです。

キュルケ

私の名はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

人は私の事を微熱のキュルケと呼ぶわ。

ゼロのルイズとは違う、ボンキュッボンのナイスバディの女性よ♪
トラインアグルのメイジだし、全てで彼女に勝ってるわ。
でもね・・・。

一つだけどうしても勝てない事が出来たの・・・。
それは・・・。

「きゃ~~~~♪ペソペソちゃん、カワイイ♪」

そう、ルイズの使い魔、ペソペソ。

悔しいけど見てるだけで癒される使い魔なんて初めてよ。

何でもルイズに召還されたタロウ先生が代わりの使い魔として与えたって言うじゃ無い。

はあ、いいわね・・・。

そして何故か最近タバサも私から離れてタロウ先生の所に入り浸っているのよ。

周囲に色んなオトコは居るけど、最近は微熱も感じないのよ。

どこかに私の微熱を感じさせてくれる人は居ないのかしらね。

最近本当に同学年の男子をからかって楽しく無いのよね。

ルイズもゼロとか罵倒されてもペソペソ居るからいいモンだし・・・。

ヒマなのでタバサを少しだけよ。

少しだけストーリーカーして見たの。

そしたらタロウ先生の自宅に毎日の様に通っているのよ。

見た事の無いメイジの男性も居るし、メイドさんに元秘書のロングビルさんも。

確かタロウ先生って最近、この国に来たばかりよね。

どうしてあんなに人が集まるの??

凄いメイジだって事は分かってるけど、それだけじゃ無い??

それから私は彼もついでにストーカー始めたの。

授業?どうでも良いわ。

セクハラ校長の居る学院ですもの。

イザと言う時はアレにお尻でも触らせたら何とかなるわよ。

そしたらさ、タバサったら先生のトコで本ばかり見てるのよ。

ええ、確かに本だわ。

でも見た事の無い表紙の本ね・・・。

華やかな絵が描いてあって、表装も見た事無い感じだし・・・。

不振に思っ、タバサが木陰で読んる本を一冊だけ勝手に読んで見たのよ。

そしたらさ・・・。

ナニ???コレ!!!!!!

ゴーレムを操る男の子が綺麗な男の子と・・・・・・・・。。

変な事してる内容なのよ。

タバサったら、何時の間にこんな本を・・・。

でも彼女は怒って本を奪い返すと、部屋に入って引き篋もってしまっただのよ。

あんな本って今まで絶対に見た事無かったわよ。

もしかしてタロウ先生の家にある本かしら・・・。

こうと思ったら行動するのがツェルプストー家の信条よ。

もう黙っていられないわ。

私はタロウ先生の自宅を訪ねる事にしたの。
用件は・・・。

勉強を教わるでいいわね。名目上は。

学院のすぐ近くに建てられたタロウ御殿は、先生が一人で建てたとは思えない位、

ガッチリした作りだわ。

あの素敵なメイジの方の家も敷地内にあるみたい。
それにしても綺麗な池ね・・・。

「こんにちわ♪学院の生徒のキュルケと言います。
タロウ先生はいらっしゃいますか？」

「はい、今開けますね♪」

学院で働いてたメイドさんだわ。この方。
名前は知らないけど・・・。

「えっと、ご主人様に御用でしょうか？」

「ハイ。少し魔法の事でお聞きしたい事がありまして。」

「もうすぐ帰って来ると思いますから、中でお待ち頂けますか？」

ヨッシャ♪中に入ればコッチのモノよ。

きっとあの本の秘密もココにあるわ。

あ、あんなイヤラシイ本なんて・・・。

私も読んで見たいのよおお。

でも初めての家で家捜しなんて出来ないわ。
どうしよう……。

そしたらタロウ先生がお帰りになられたの。

女は度胸よ。

直球で勝負だわ。

「タロウ先生、こんにちわ。」

「おや、貴女は……。キュルケさんでは無かったですか？」

「ハイ、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーです。」

長いのでキュルケで結構ですわ。」

「そうですが、ではキュルケさん、どう言う用件でしょ。」

出きる事ならご相談に乗りますが。」

「あのおお、タロウ先生ってタバサに変な本を貸していませんか？」

ギクッ……。もう見られたのか。

あれだけ管理には注意しろとタバサには言ってたのに……。

「さ、さあ……どんな本かは知りませんが……。」

ウソだわね。絶対にクロよ。この人。

知らんぷりしてやがるわ。

絶対にカモにしたる。。

「先生、最近タバサがこの家に良く通っているのを見かけていたの。」

そしたらアノ本でしょ。

若い男性同士が熱い抱擁を交わすいかがわしい本……。

でもね。先生。

私も少しは興味ありますの。ああ言う本に。

もし良かったら私にも読ませて頂けないかな……と。」

うわ~~~~!!不味い。

まだ発売前だし、店も無いのに出せる訳が無いっしょ。
どうするべ。

そしたら丁度タイミング良くタバサたんが来賓されたのです。

「……キュルケ。どうしてタロウ先生の家に来てるの？」

「あら、タバサ。私も貴女が読んでる本を読みたくて来たのよ。」

もう暴露したるもんね。あんな楽しそうな本を一人占めなんて許さないわ♪

「……アレはまだこの国では売り出していない先生が作った本。私は彼に読後感想を伝えているの。コレも仕事……。」

「アラ？だったら私も感想を言うわ。

ね、先生。私だったら熱い話も言えますわ。だから……。」

「分かりました。キュルケさん。

ただし、一つだけ約束してください。

今から渡す本は将来、この国で売り出す予定です。

ですので、タバサさんと貴女以外には絶対に読ませない。
タバサさんも読む場合は必ず自室かココだけで読む事。
もし他に知られたら、もう貴女にも読ませません。」

「・・・先生、それは困る。

もう絶対に外では読まない。誰にも知られない様にする。
この本が無いと私は生きて逝けない。

カホル君とシンヂ君の恋の話は、私の心のオアシス。」

タバサは涙目でタロウに訴えてる。
「ただ真剣に読みたいの??」

「うわっ、モロに言ってますわ。タバサさん。

わ、分りました。とにかく秘密にしててくださいよ。

まだ初期ロットしか無いんですから。

今後はタバサさんとキュルケさんに感想をお願いします。」

タロウ先生から与えられた「新世紀ウエヴァンゲリホン」は本当に
衝撃的な話だった。

お父様に捨てられたシンヂ君がゴーレムに無理やり乗せられ、
戦いの中で知り合った彼との悲しい恋と別れ。

もうコレを読んだらイーデルヴァイの勇者なんて陳腐で読めなくな
るわ。

タバサは彼等の恋愛の話に真剣に読んで、読後感想文をタロウ様に
渡してました。

え？私のタロウ先生の呼び方が変わってるって？

当然でしょ。

こんな衝撃的なストーリーを作られる方を先生如きで済ませられる
訳がありませんわ。

ああ、シンヂ君、私が貴方の側に居たら、絶対に幸せに出きるのに・。

ハイ、キュルケさんもコツチ側に来てしまいました。

彼女達以外には発売出きる体制が整うまでは絶対に封印しとかなないとね。

はあ、次のシリーズも考えておくべきか。

「ああ、カホル様あああ・・・。」

キュルケ（後書き）

この話はフィクションです。
ええ、すべてフィクションです。

本年最後の更新となりますが、皆様、良いお年を。
タゴサク

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151z/>

キモ男 カンバ〜〜ック♪

2011年12月31日16時53分発行